仙台市文化財調査報告書第125集

仙台平野の遺跡群Ⅷ

——昭和63年度発掘調査報告書——

1989年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第125集

仙台平野の遺跡群Ⅷ

——昭和63年度発掘調査報告書——

１９８９年３月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　　文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」調査に着手して8年が経過しました。これまで陸奥国分寺、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や、郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査などを行ってまいりましたが、特に今年度は、陸奥国分尼寺跡、郡山遺跡にかかわる調査を実施しました。

近年、文化や歴史的事項に関する市民意識は、少しずつ高まりをみせてきておるとは言え、第一次、第二次オイルショック以来、文化財一般に対する無関心も一方では芽ばえている事実も見のがせません。オイルショックによる景気低迷が徐々に回復し、新しいわが国の進路を見極めなければならないこの時期こそ、しっかりと生活の中に文化に対する位置を確保しなければならないと考えます。

開発に伴う発掘調査が多い中、この「仙台平野の遺跡群」の調査は、一歩一歩、その成果を上げて来たものと言えますし、また、生活の中に文化財をいかに位置付けていくかを考える手がかりをあたえてくれているものと考えます。こうした調査も多くの市民の方々や有識者のご支援があってこそ、成果を上げられるものと思います。

昨年度末までに旧宮城町、泉市、秋保町が仙台市の仲間入りしましたので、これからは、もっと広い視野に立って調査を行っていく必要があります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存でありますので、今後とも、ご指導、ご支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成元年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は昭和63年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書中、郡山遺跡の調査報告は略報とし、詳細については、仙台市文化財調査報告書第124集「郡山遺跡IX ― 昭和63年度発掘調査概報 ―」の中にまとめた。

3．本書中の土色については「新版標準土色帖」（小山・佐原：1973）を使用した。

4．第1図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」「仙台南東部」の一部を縮小して使用したものである。

5．第2図は仙台市仙塩広域都市計画図2千5百分の1の一部を縮小して使用した。

6．実測図中並びに本文中で記載した方位は磁北に統一してある。これは、仙台では、真北に対して西偏7°20′である。

7．実測図中の水糸高は標高で示してある。

8．本文執筆は結城慎一（Ⅰ、Ⅱ〔2〕）と主浜光朗（Ⅱ〔1〕）が担当した。編集も両者が行った。

9．本文中に掲載した遺構及び実測図、写真並びに出土遺物は、全て仙台市教育委員会で保管している。

10．今年度の事業は昭和63年5月に着手し、平成元年3月に終了した。

本　文　目　次

序　文
例　　言
I　調査計画と実績……1
II　発掘調査報告……2
〔1〕陸奥国分尼寺跡……2
1．遺跡の位置と環境……2
2．調査に至る経過……3
3．基本層位……4
4．検出遺構……6
5．出土遺物……13
6．まとめ……20
〔2〕郡山遺跡……50

図　表　目　次

第1図　周辺の遺跡……2
第2図　調査区位置図……3
第3図　基本層位模式図……4
第4図　遺構配置図……5
第5図　SK－1土坑……6
第6図　SK－2土坑……7
第7図　IV区断面図……7
第8図　IV区SX－1性格不明遺構……8
第9図　I区南部とIII区北東部……9・10
第10図　I区・III区東壁断面図……11
第11図　III区北西部ピット群……14
第12図　軒丸瓦……21
第13図　軒平瓦I……22
第14図　軒平瓦II……23
第15図　丸瓦I……24
第16図　丸瓦II……25
第17図　平瓦I……26
第18図　平瓦II……27
第19図　平瓦III……28
第20図　道具瓦I……29
第21図　道具瓦II……30
第22図　文字瓦ほか……31
第23図　近世陶磁器・カワラケ・土師器…32
第24図　中世陶器・瓦質土器……33
第25図　平瓦片……34
第26図　郡山遺跡と調査位置……51
写真1　平瓦片……34
写真2　SX－1……35
写真3　SX－2……35
写真4　SX－2遺物出土状況……35
写真5　III区北東部壁（SX－2）断面…36
写真6　SX－3……36

写真７　ＳＫ－１……36
写真８　ＳＫ－２……37
写真９　III区西部のピット群……37
写真10　III区ピット１遺物出土状況……37
写真11　軒丸瓦Ⅰ……38
写真12　軒丸瓦II……39
写真13　軒平瓦Ⅰ……40
写真14　軒平瓦II……41
写真15　軒平瓦III……42
写真16　軒平瓦IV・丸瓦Ⅰ……43
写真17　丸瓦II……44
写真18　平瓦……45
写真19　道具瓦……46
写真20　文字瓦……47
写真21　近世陶磁器……48
写真22　その他の遺物……49
第１表　発掘調査実績表……1
第２表　軒瓦出土表……13
第３表　小柱穴・ピット群註記表……15
第４表　軒丸瓦・軒平瓦観察表……23
第５表　丸瓦観察表……25
第６表　平瓦観察表……28
第７表　道具瓦観察表……33
第８表　文字瓦ほか観察表……33
第９表　近世陶磁器・カワラケ・土師器観察表……34
第10表　中世陶器・瓦質土器観察表……34
第11表　平瓦片観察表……34

I. 調査計画と実績

現在の仙台市のおける周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、650箇所に達している。これらの遺跡は、その一つ一つが先人の残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子とを現代に伝えるものである。われわれは、これらの文化遺産をわれわれの世代で消滅させることなく、次の世代へと継承していくべき責務を担っている。また、このような文化財保護の努力を続ける一方で、これらの文化遺産を学術研究の場にとどまらず、広く学校教育や社会教育の場、そして市民生活の中においても活用していく必要がある。しかし、ここ数年来の都市化に伴う公共事業や民間による開発行為の増加は、特に平野部において著しく、これらの遺跡の中にはそれによって破壊の危機にさらされているものも数多い。

当教育委員会では、これらの遺跡の範囲の確認と性格の究明のため、昭和56年度より国の補助を受け「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。８年目をむかえた今年度は、陸奥国分尼寺跡、郡山遺跡の２遺跡で計８箇所の発掘調査を実施した。

今年度の発掘調査計画と実績は以下のとおりである。

１．目　　的　仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査
　　個人住宅の建築等の小規模な開発に伴う発掘調査

２．調査面積　約660m²

３．調査期間　昭和63年５月９日～11月14日

４．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育局社会教育部文化財課
　　（課長）早坂春一
　　同課調査係（係長）佐藤　隆　（主任）結城慎一　（主事）主浜光朗
　　同課管理係（係長）成田時雄　（主事）山口　宏

調査・整理参加者　　根本展江、庄子錦一郎、相沢義徳、吉田りつ子、外川みつ子
　　佐久間広恵、遠藤深雪、増田瑞枝、笹川光夫

調査協力　小枝仙涯（曹洞宗国分尼寺住職）

第１表　発掘調査実績表

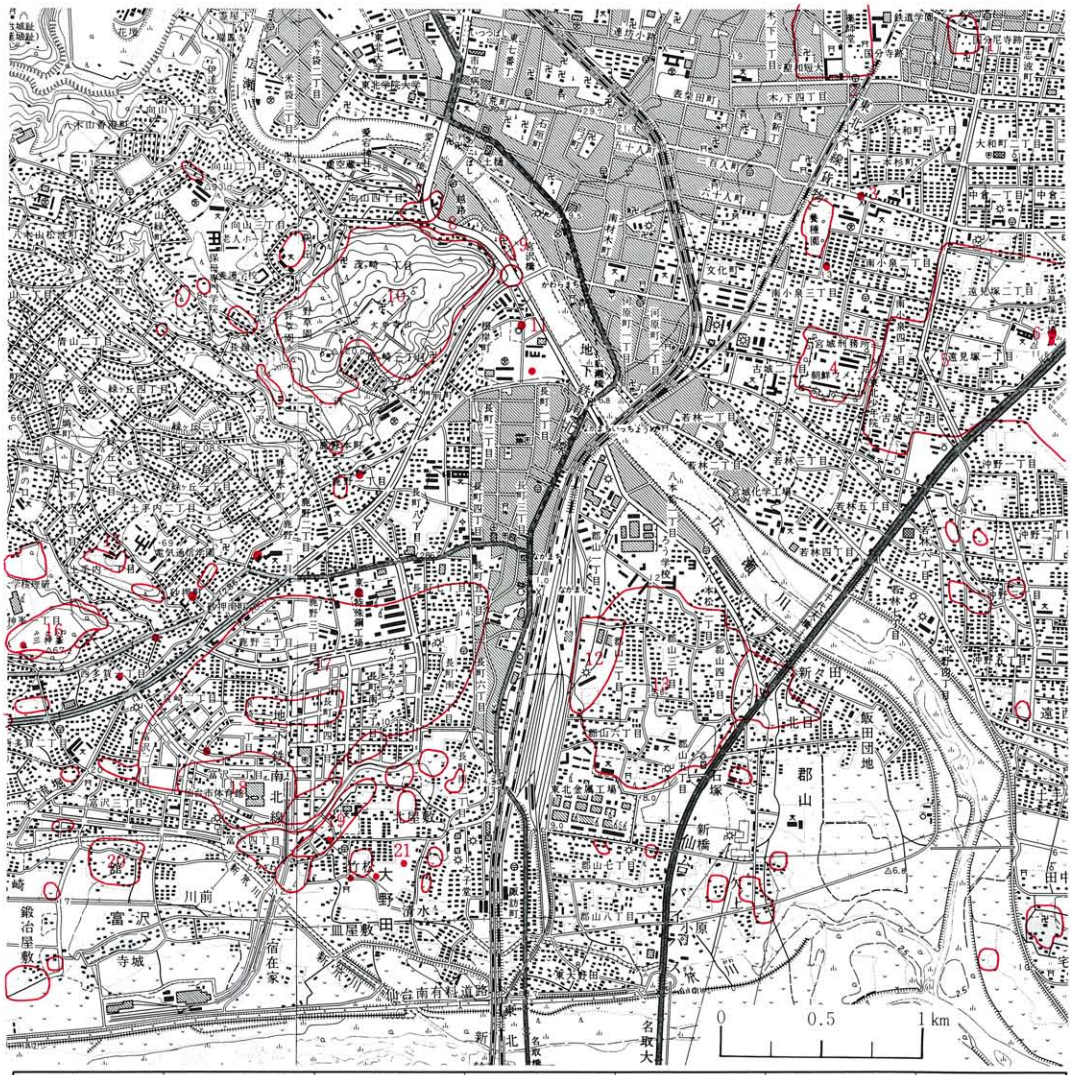
遺跡名＼事項		所　在　地	申請所（住所・氏名）	調査事由	対象面積	調査面積	調　査　面　積
陸奥国分尼寺跡		仙台市白萩町309	―――	遺構確認調査	446㎡	446㎡	昭和63年５月９日～６月30日
郡山遺跡	第75次発掘調査	仙台市郡山五丁目212-3	東京都文京区白山4-3-12　村上澄雄	共同住宅新築	396.75㎡	19㎡	〃　５月26日、27日
	第76次発掘調査	仙台市郡山五丁目140-1	仙台市郡山五丁目12―14　佐藤文雄	住宅新築	1346.97㎡	16㎡	〃　６月１日～６月７日
	第78次発掘調査	仙台市郡山三丁目17―15	仙台市郡山三丁目17―15　小野光平	住宅新築	333.64㎡	4㎡	〃　７月18日
	第79次発掘調査	仙台市郡山三丁目27-2,10	仙台市郡山三丁目12―12　浅野初朗	住宅新築	433.53㎡	11㎡	〃　８月12日～８月20日
	第80次発掘調査	仙台市郡山二丁目49―36	横浜市金沢区富岡東1-17-11-101　遊　伸民	共同住宅新築	535.10㎡	12㎡	〃　８月23日～８月25日
	第81次発掘調査	仙台市郡山五丁目６－６	仙台市郡山五丁目6-6　東北地方建設局仙台工事事務所長　佐々木隆士	変電・無線室新築	81㎡	100㎡	〃　９月22日～９月24日
	第82次発掘調査	仙台市郡山二丁目５－14	仙台市郡山二丁目５－14　下斗米樣之助	住宅新築	227.95㎡	48㎡	〃　10月28日～11月14日

II. 発掘調査報告

〔1〕陸奥国分尼寺跡

1．遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡（仙台市文化財登録番号C－420、宮城県遺跡地名登載番号01020）は、仙台市の東部、仙台市白萩町、宮千代一丁目に所在し、東北線仙台駅の東南約2.5kmの位置にある。本遺跡の西方約600mに位置する陸奥国分寺跡のすぐ西側を北東から南西方向に長町 ― 利府線と呼ばれる地質構造線が走り、仙台市街台地と沖積平野を分けている。本遺跡は、長町 ― 利



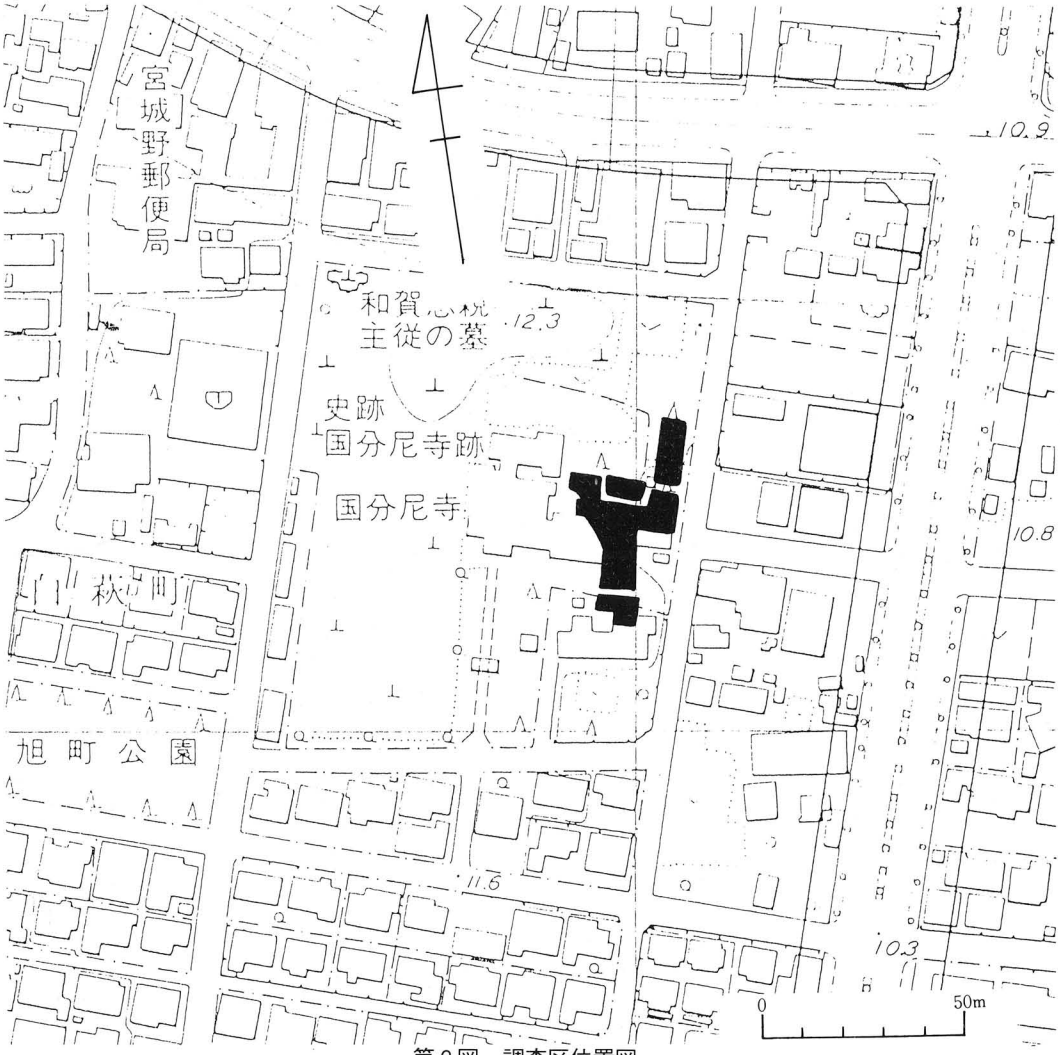
1．陸奥国分尼寺跡	2．陸奥国分寺跡	3．法領塚古墳	4．若林城跡	5．南小泉遺跡	6．遠見塚古墳	7．愛宕山横穴群
8．大年寺山横穴群	9．宗禅寺横穴群	10．茂ケ崎城跡	11．兜塚古墳	12．西台畑遺跡	13．郡山遺跡	14．北目城跡
15．土手内遺跡	16．三神峯遺跡	17．富沢遺跡	18．山口遺跡	19．六反田遺跡	20．富沢館跡	21．王ノ壇古墳

第1図　周辺の遺跡

府線の北西側の中町段丘の延長部分にあたるが、地形的には宮城野海岸平野の西端部にあたる。標高は11m から12m である。周辺の遺跡には、前述の陸奥国分寺跡があり、北東約9.5km には陸奥国府多賀城跡及び多賀城廃寺跡がある。また、北方約 3 km には陸奥国分尼寺を含むこれらの遺跡に瓦を供給した台の原・小田原窯跡群がある。南方には、南小泉遺跡、若林城跡などの遺跡がある。

2．調査に至る経過

本遺跡は、古くから現在の曹洞宗国分尼寺地内、及びその周辺に古瓦が散布していたこと、礎石の残る観音塚があったことから、陸奥国分尼寺跡であると言われていたところである。陸奥国分尼寺は、天平13（741）年の聖武天皇の勅によって「法華滅罪之寺」として、国分僧寺とともに建立されているが、承暦 4 （1080）年に顚倒し、文治 5 （1189）年の源頼朝の平泉討伐の際、兵火により焼け落ちた後についての記録は残っていない。元亀元（1570）年になってそ



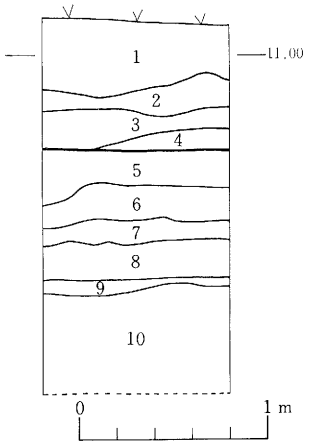
第２図　調査区位置図

れまでの天台・真言宗を曹洞宗に転宗し、現在に至っている。昭和23年10月に観音塚周辺が国指定史跡となったが、昭和30年代には、無断現状変更行為により、史跡指定地内に多くの家屋が建てられているという事態となった。このため、仙台市は昭和39年に伊東信雄氏を担当者として、発掘調査を実施した。その結果従来観音塚と呼ばれていたものが、金堂跡と推定された。昭和42年度には公有化、翌43年度には環境整備、それに伴って観音塚中央部の調査が実施された。また、昭和51年度に推定金堂東隣り、同59年度には西隣りで発掘調査が実施され、前者では、国分尼寺に関連する遺構は検出されず、後者では、掘立柱あるいは礎石建ちの建物跡の基礎地業の跡と考えられる遺構と瓦溜めが検出されている。昭和60年度、61年度にも現在の国分尼寺地内で遺構確認調査が実施されたが、明確に陸奥国分尼寺跡に関連すると考えられる遺構は検出されなかった。

今回の調査は、国分尼寺地内東部における遺構確認調査であり、陸奥国分尼寺跡の推定中軸線の20～30m東、推定南辺を跨ぐ位置に、埋設管や排土の関係を考慮して北側からⅠ～Ⅳ区までの4箇所設定した。面積は446m² である。調査は、昭和63年5月9日より開始した。

3．基本層位

調査地点は、国分尼寺の庫裡及び倉庫、庭地だった部分であり、それ以前は畑地あるいは、竹林となっていたところである。調査区の西側では、庫裡建設の際になされた盛土が確認されており、樹木の抜根痕もかなり見うけられた。基本層位は第1層表土から、基底の砂礫層まで10層確認された。第1、2層は表土及び攪乱層である。第3層は黒色系のシルト層（旧表土）で調査区中央部にのみ分布する。第4層はローム漸移層、第5層以下第9層まではローム層であり、第10層は砂礫層である。第5層上面が所謂地山面であり、今回の調査の遺構検出面となっている。第5層以下は、調査区中央寄りの攪乱坑の壁面で確認した。



層	土　色	土　性
1	盛	土
2	10YR3/3 暗褐色	シルト
3	10YR3/4 暗褐色	シルト
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土
5	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土
6	7.5YR8/4 浅黄橙色	シルト質砂
7	7.5YR5/6 明褐色	シルト質粘土
8	10YR6/8 明黄褐色	シルト質粘土
9	10YR7/8 黄橙色	粘土
10	礫	層

第3図　基本層位模式図

Ⅰ区
カクラン
SX−3
SX−5
Ⅱ区
カクラン
SX−2
SX−4
SK−2
SK−1
カクラン
Ⅲ区
0
5m
カクラン
カクラン
Ⅳ区
SX−1

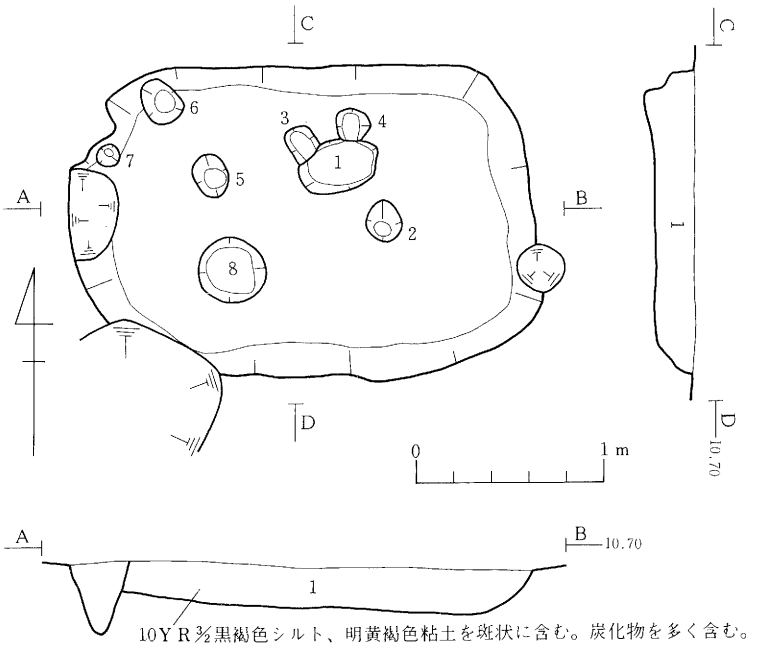
第４図　遺構配置図

4．検出遺構

今回の調査によって検出された遺構は、土坑２基、性格不明遺構５基、小柱穴・ピット69個である。全て第５層上面で検出されている。今回の調査は、調査区を陸奥国分尼寺跡の推定南辺を跨ぐように設定したが、南辺を区画すると考えられる遺構は確認されなかった。

ＳＫ－１土坑

調査区中央部、III区の北寄りで検出された。攪乱及び後世のピットに切られている。長軸250cm、短軸160cmの規模で楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、深さは24cmである。堆積土は単層（墨褐色シルト）であり、多量の炭化物と、斑に明黄褐色粘土粒を含んでいる。底面は平坦であるがやや東側へ傾斜している。底面から８個のピットが検出されているが、それらの規模、配置関係に規則性はみられない。遺物は堆積土中より、丸瓦・平瓦片、中世陶器片が、ピット８より丸瓦片が出土している。

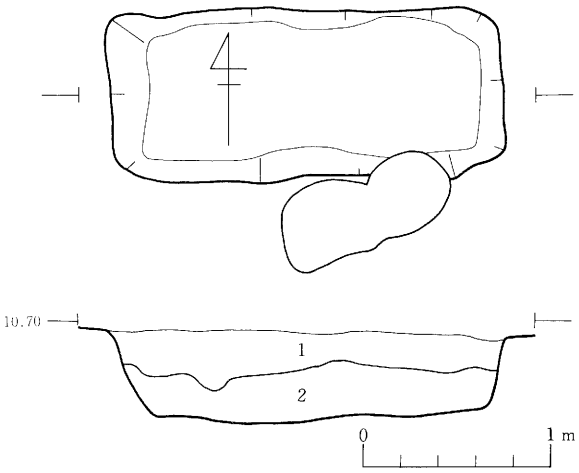


第５図　ＳＫ－１土坑

ＳＫ－２土坑

調査区中央部、III区の北寄り、SK－１の北西側で検出された。ピット２、３に切られ、ピット27、28、29を切っている。長軸210cm、短軸95cmの規模で、隅丸長方形を呈し、深さは45cmである。堆積土は２層に分かれ、上層には多量の炭化物、下層には霜降り状に粘土粒を含んでいる。底面は平坦である。礫層上面まで掘り込み、その面を底面としている。壁は底面から急角度で立ち上がっている。遺物は堆積土中より、丸瓦・平瓦片、中世陶器片、鉄製品が出土し

ている。

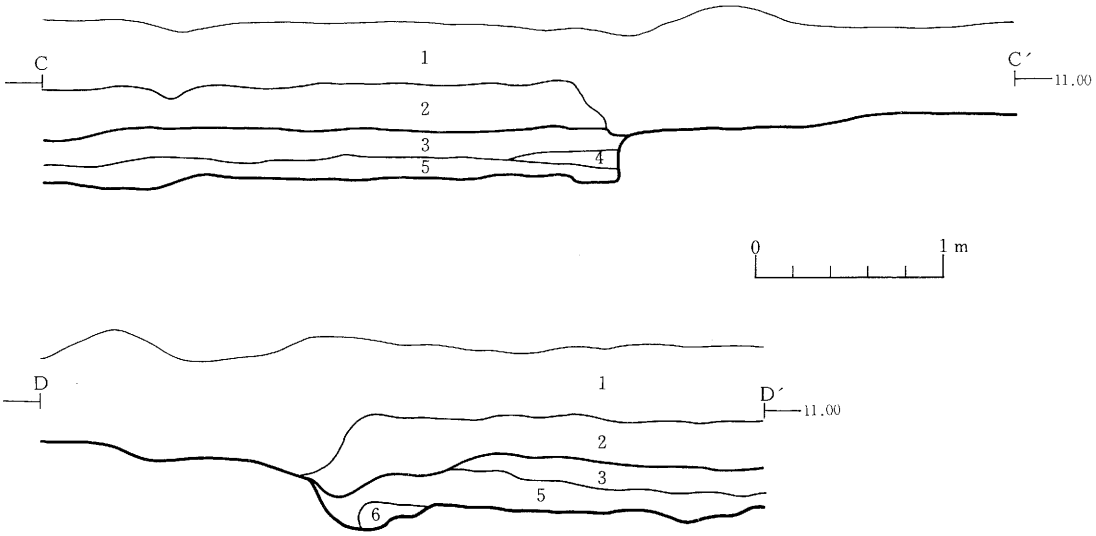


層	土　色	土　性	備　考
1	7.5YR⅔極暗褐色	シルト	多量の炭化物を含む、焼土粒含む
2	10YR¾ 暗 褐 色	粘土質シルト	10YR⅚明黄褐粘土を霜ふり状に含む

第6図　SK－2土坑

SX－1性格不明遺構

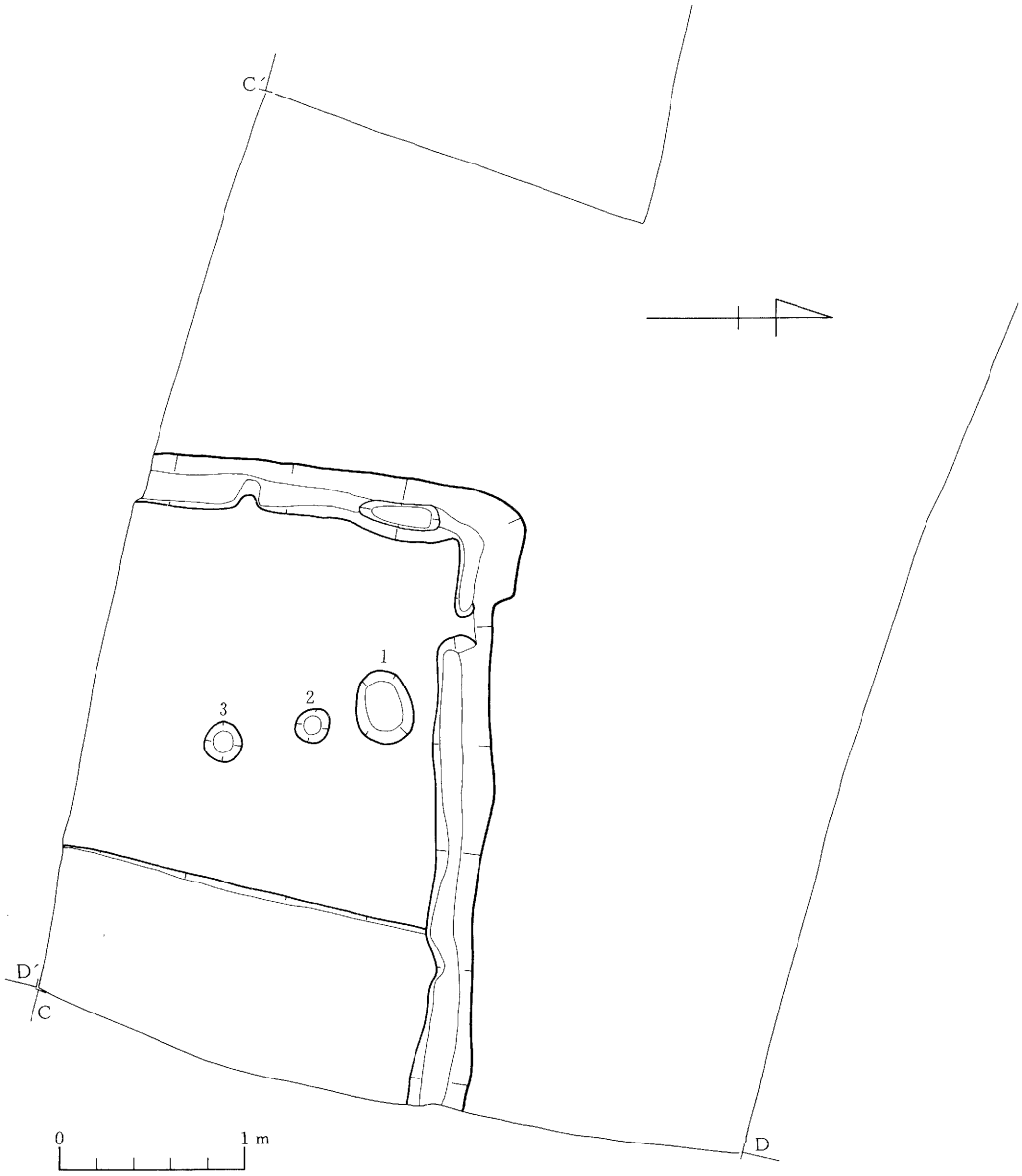
調査区南部のⅣ区南東端で検出された。南側及び東側の調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。330cm 以上×240cm 以上の規模で、隅丸の方形を基調



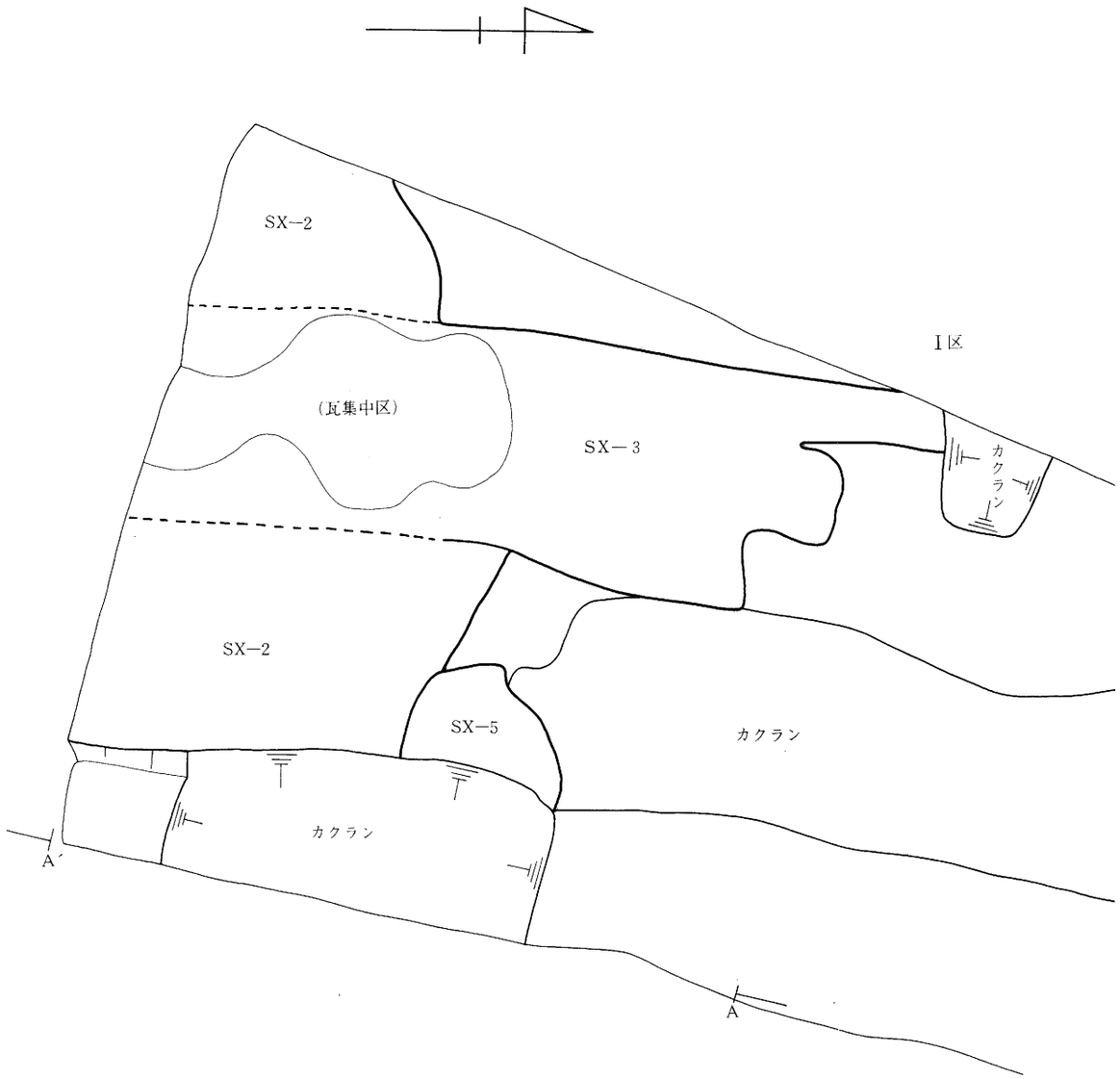
層	土　色	土　性	備　考
1			盛土、攪乱層
2	7.5YR⅔黒 褐 色	シルト	若干の炭化物粒含む、部分的にローム粒子含む
3	10YR⅔ 暗 褐 色	粘土質シルト	SX－1酸化鉄含む、灰白色火山灰を微量に含む
4	5Y⅗ オリーブ黒色	粘土	SX－1酸化鉄含む（南壁のみ）
5	10Y⅗ オリーブ黒色	粘土	SX－1炭化物粒、酸化鉄含む
6	2.5Y⅔ 黒 褐 色	粘土	SX－1

第7図　Ⅳ区断面図

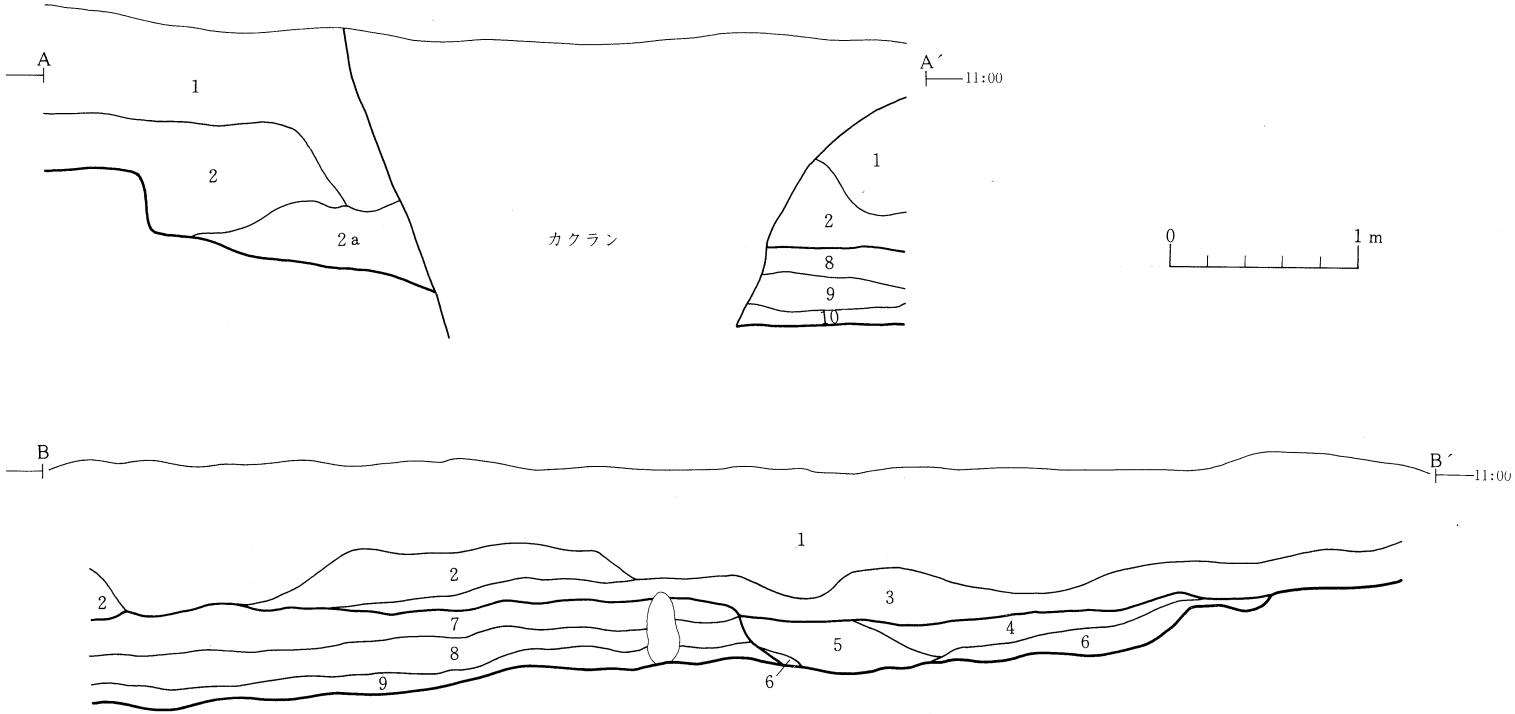
とした平面形を呈すると考えられる。深さは48cm である。西辺の軸方向は N－8°－E である。堆積土は 4 層に分けられ、最上層の下部に灰白色火山灰を斑点状に含んでいる。底面は、ほぼ平坦であるが凸凹のある部分もみられる。底面から周溝及びピットが検出された。周溝は、一部途切れているが、遺構検出部分ではほぼ全周している。底面幅は 7 ～15cm、深さ 3 ～13cm、断面形は「U」字形で、底面レベルは北西コーナー付近が最も高く、南側及び東側へ傾斜している。ピットは 3 個検出されたが、その規模、配置関係に規則性はみられない。遺物は、堆積土下部及びピット 3 より平瓦片が出土している。



第 8 図　Ⅳ区　SX－1 性格不明遺構



第９図　Ⅰ区南部とⅢ区北東部



層	土　色	土　性	備　考
1			盛土、撹乱
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	礫含む（旧表土）
2 a	10YR3/3 暗褐色	シルト	ぽさぽさしている（木根）
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	（旧耕作土）
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	この層以下、ＳＸ－２堆積土
5	7.5YR3/3暗褐色	シルト	ローム粒、砂粒斑に含む
6	10YR2/2 黒褐色	シルト	ロームブロック含む
7	7.5YR3/2黒褐色	シルト	ローム粒、炭化物粒少量含む
8	7.5YR2/2黒褐色	シルト	ローム粒、小礫微量に含む
9	10YR4/4 褐　色	シルト	上部に灰白色火山灰をブロック状に含む
10	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、砂粒含む（Ⅰ区のみ）

第10図　Ⅰ・Ⅲ区東壁断面図

ＳＸ－２性格不明遺構

調査区東端部、Ｉ区南部からIII区東北部に跨がって検出された。東側及び西側の調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。遺構保存のため、一部に断面確認のトレンチを入れたのみで掘り込み精査を行なっていない。そのため、壁面及び底面の詳細については不明である。

調査区東壁沿いに入れたトレンチの状況をみると、堆積土は、南壁から3m付近を境に、南側と北側で堆積状況が異なっており、底面の状況からは、堆積土が変化する位置に対応するように底面の盛り上がりがみられる。これらのことから、複数の遺構が重複していることも考えられるが部分的な掘り込みであり、遺構の上面検出の段階では遺構の重複は確認されず、遺物についても分離していないため、１基の遺構として記述する。

調査区内で３ケ所の攪乱坑と、SX－３、４、５に切られている。12m×8m以上の規模であるが、平面形は不明である。確認トレンチ及び攪乱坑の壁面の状況から、深さは50cm程度であると考えられる。堆積土は７層に分けられる。６層の上部に灰白色火山灰がブロック状あるいは層状に含まれている。底面と壁面については、確認トレンチの状況から、底面に一部盛り上がる部分がある他はほぼ平坦であり、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。また、西側の攪乱坑の壁面で、焼け面及び焼土、炭化物が検出されている。遺物は、堆積土上面から、軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片、土師器片、須恵器片、中世陶器片、鉄製品、鉄滓、羽口片が出土している。堆積土６層から土師器坏が３点、底面から軒丸瓦４点、軒平瓦３点、平瓦・丸瓦片、土師器片が出土している。

ＳＸ－３性格不明遺構

調査区北東部、Ｉ区の南側で検出された。南側の調査区外へ延びており、今回検出されたのは、その一部であると考えられる。SX－２と重複している。検出面において新旧関係は明確にできなかったが、本遺構は遺構検出段階で極多量の瓦が出土しており、その出土状況からＸ－２の北壁ラインを跨ぐような状況を呈して南北方向に広がり、なおかつ南側へ傾斜をもっていることから、SX－２を切っているものと考えられる。2m×6m以上の規模で、北側に張り出した長方形を基調とした平面形を呈すると考えられる。上面確認段階で出土した瓦を取り上げたのみで、掘り込み精査を行っていないため、その他の詳細は不明である。遺物は、軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片が多量に出土している。その他に若干の土師器片、中世陶器片もみられる。

ＳＸ－４性格不明遺構

調査区中央部東寄りのIII区東側で検出された。攪乱坑に切られ、SX－２を切っている。60cm×50cm以上の規模で、楕円形を基調とした平面形を呈するものと考えられる。上面確認の

みで掘り込み精査を行っていないため詳細は不明である。出土遺物はない。

ＳＸ－５性格不明遺構

調査区東よりのＩ区東側で検出された。攪乱坑に切られ、SX－２を切っている。145cm 以上×90cm 以上の規模で、不整円形を呈するものと考えられる。上面確認のみで掘り込み精査を行っていないため詳細は不明である。出土遺物はない。

小柱穴・ピット群

Ｉ区を除く調査区のほぼ全域にピットが検出されたが、木根や後世の耕作土や盛土から掘り込まれたピットが多く、遺構と認定したピットは全体で69個である。特に調査区中央部のIII区中央部から西側にかけて集中して検出されている。直径20～50cm の円形を基調とした平面形を呈するものが多いが、方形を基調とした平面形のものもみられる。柱痕跡が確認されるものもみられ、建物跡の存在が考えられるが、小柱穴・ピット群が調査区外に広がっており、後世の耕作や抜根等による攪乱のため、柱穴の組み合わせや掘立柱建物跡の配置などは不明である。これらからの出土遺物は、軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片、土師器片、中世陶器片、鉄製品などがある。

５．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、瓦、土師器、須恵器、中世陶器、近世以降の陶磁器、鉄製品、鉄滓、石製品等である。その中でも瓦が大半を占めている。しかし、完形のものはみられず、大部分は細片である。

(1) 瓦

瓦は基本層１～４層（表土として一括した。）、SX－２、SX－３を中心に多量に出土している。種類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、文字瓦、その他の瓦等である。分類については、『陸奥国分寺跡』（陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　1961）の分類基準に準じている。

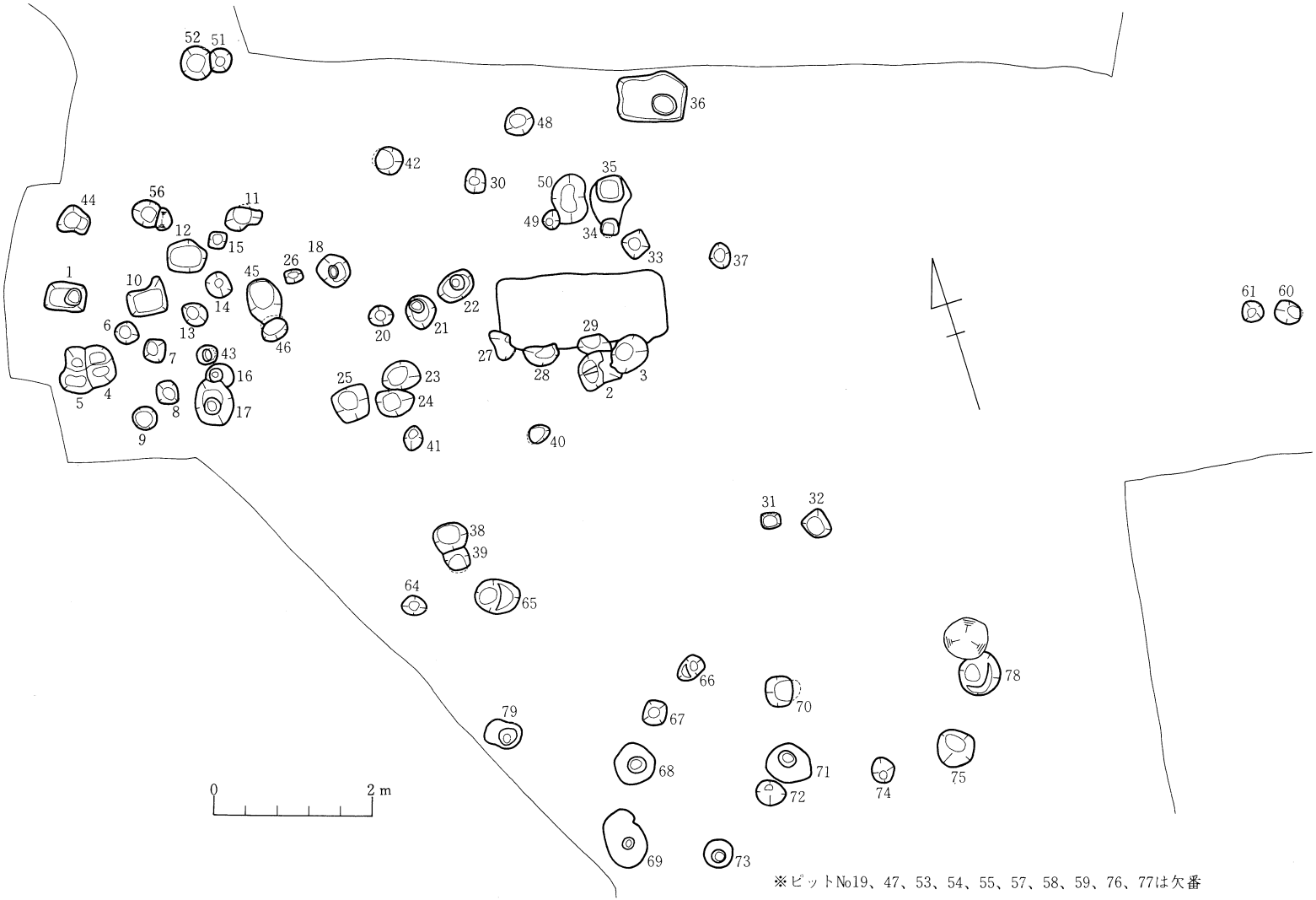
第２表　軒瓦出土表

種類	分類	点数	合計
重弁蓮華文	第１類	4	15
	第３類	3	
	不明	8	
細弁蓮華文	第１類	1	5
	第２類	1	
	不明	3	
歯車文		1	1
不明		7	7
合計			28

種類	分類	点数	合計
重弧文	第１類	5	6
	第２類	1	
偏行唐草文	第２類	7	8
	不明	1	
均整唐草文	第２類	1	1
三重波文		1	1
不明		8	8
合計			24

軒丸瓦

合計28点出土している。種類は、重弁蓮華文、細弁蓮華文、歯車文その他に瓦当面が剝落して種類の不明なものがある。



※ピットNo19、47、53、54、55、57、58、59、76、77は欠番

第11図　Ⅲ区北西部ピット群

第３表　小柱穴・ピット群註記表

（単位cm）

No	掘り方	土　色・土　性	柱痕跡	土　色・土　性	深さ	備　考
1	52×37	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	22×20	黒褐(10YR3/2)シルト	48	軒丸瓦片、丸瓦片出土
2	42×35	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		47	P29を切る。瓦細片出土。炭化物含む。
3	52×43	暗褐(7.5YR3/3)シルト	—		52	SK－2を切る。丸瓦・平瓦片、砥石、鉄製品出土。
4	52×36	黒褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		32	P５を切る。炭化物・粘土粒含む。
5	59×37	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		33	丸瓦片出土・炭化物、焼土粒含む。
6	31×30	黒褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		35	炭化物含む。
7	30×26	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		33	粒土粒含む。
8	30×27	黒褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		27	炭化物・粘土粒含む。
9	30×30	黒褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		35	炭化物、粘土粒含む。
10	50×45	黒褐(10YR3/2)シルト	—		21	軒平瓦片・平瓦片出土。炭化物、焼土粒含む。
11	41×32	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		48	炭化物、粘土粒、粘土粒含む。
12	50×40	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		33	上部に焼土塊、丸瓦、瓦片出土。
13	33×30	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		19	炭化物粘土粒含む。
14	34×30	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		23	炭化物、粘土粒含む。
15	22×20	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		13	粘土粒含む。
16	38×28	暗褐(7.5YR3/3)シルト	18×16	暗褐(7.5YR3/3)粘土質シルト	50	柱痕跡に炭化物、粘土粒含まれる。
17	53×48	黒褐(10YR3/3)シルト	21×20	暗褐(10YR3/3)シルト	46	P16を切る。平瓦・丸瓦片出土。
18	43×40	暗褐(10YR3/4)シルト	16×14	黒褐(10YR3/2)シルト質粘土	39	掘り方に炭化物、焼土粒含む。
20	31×28	黒褐(7.5YR3/2)シルト	—		21	粘土粒含む。
21	43×37	暗褐(7.5YR3/4)粘土質シルト	20×17	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	45	平瓦片出土。粘土粒、炭化物含む。
22	48×33	暗褐(7.5YR3/4)粘土質シルト	20×18	黒褐(7.5YR3/2)シルト	32	粘土粒、炭化物含む。
23	50×36	黒褐(10YR3/2)シルト	—		49	
24	48×34	黒褐(2.5Y3/2)シルト	—		36	鉄製品出土。粘土粒、炭化物含む。
25	48×46	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		35	粘土粒、炭化物含む。
26	24×18	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		25	粘土粒、炭化物含む。
27	40×22	暗褐(10YR3/3)シルト	—		37	SK－2を切る。炭化物含む。
28	45×25	暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	—		45	SK－2を切る。平瓦片出土。炭化物、粘土粒含む。
29	40×20	暗褐(7.5YR3/4)シルト	—		44	SK－2を切りP２に切られる。粘土粒含む。
30	32×26	黒褐(10YR3/1)シルト	—		27	平瓦片出土。炭化物、焼土粒、粘土粒含む。
31	27×23	暗褐(10YR3/3)シルト	—		38	瓦片出土。炭化物含む。
32	36×32	暗褐(10YR3/4)粘土質シルト	—		37	炭化物、粘土粒含む。
33	32×31	黒褐(10YR3/2)シルト	—		25	丸瓦片出土。炭化物、粘土粒含む。
34	21×20	暗褐(10YR3/4)粘土質シルト	—		31	瓦片出土。炭化物、焼土、粘土粒含む。
35	35×32	暗褐(10YR3/3)シルト	—		40	炭化物、焼土粒、粘土粒含む。
36	88×63	黒褐(10YR3/2)シルト	32×25	暗褐(7.5YR3/4)シルト	13	丸瓦片出土。炭化物、粘土粒含む。
37	33×25	黒褐(10YR3/2)シルト	—		24	
38	43×34	暗褐(10YR3/4)シルト	—		25	粘土粒含む。
39	31×27	暗褐(10YR3/4)シルト	—		26	瓦片出土。炭化物、粘土粒含む。
40	28×23	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		25	粘土粒含む。
41	33×25	暗褐(10YR3/3)シルト	—		26	炭化物含む。
42	35×35	暗褐(10YR3/4)シルト	—		38	焼土粒、炭化物、粘土粒含む。
43	26×24	黒褐(10YR3/2)シルト	16×12	黒褐(10YR2/2)シルト	43	炭化物、粘土粒含む。
44	40×37	暗褐(10YR3/3)シルト	—		28	平瓦片出土。
45	56×41	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		34	平瓦片出土。炭化物、粘土粒含む。
46	36×17	黒褐(10YR3/2)シルト	—		36	P45を切る。炭化物、粘土粒含む。
48	39×34	黒褐(10YR3/2)シルト	—		42	瓦片出土。粘土粒含む。
49	21×21	暗褐(10YR3/3)シルト	—		29	P50を切る。
50	60×42	暗褐(7.5YR3/3)シルト	—		28	平瓦・丸瓦片出土。炭化物、焼土粒、粘土粒含む。
51	29×27	暗褐(10YR3/4)シルト	—		42	P52を切る。瓦片出土、炭化物含む。
52	43×38	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		32	炭化物、粘土粒含む。
56	34×34	暗褐(10YR3/4)シルト	—		32	
60	33×29	暗褐(10YR3/4)シルト	—		39	多量の炭化物、粘土粒含む。
61	28×25	黒褐(10YR3/3)シルト	—		41	平瓦片出土。粘土粒含む。
62	28×27	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	—		17	粘土粒含む。　Ⅳ区
63	37×31	黒褐(10YR3/1)シルト	—		40	砂粒少量含む。Ⅳ区
64	31×25	黒褐(10YR2/3)粘土質シルト	—		25	炭化物、焼土、粘土粒含む。
65	56×44	暗褐(10YR3/3)シルト	—		47	平瓦片出土。炭化物、焼土粒、粘土塊含む。
66	38×26	黒褐(10YR3/2)シルト	—		34	土師器片出土。粘土粒含む。
67	32×29	暗褐(10YR3/4)シルト	—		26	炭化物、粘土粒含む。
68	53×52	黒褐(10YR3/2)シルト	22×22	暗褐(10YR3/3)シルト	23	炭化物、粘土塊含む。
69	75×52	黒褐(10YR3/2)シルト	16×15	暗褐(10YR3/4)粘土質シルト	38	炭化物、粘土塊含む。
70	37×37	黒褐(10YR3/3)シルト	—		38	炭化物、粘土塊含む。
71	59×52	黒褐(7.5YR3/2)シルト	22×20	黒褐(10YR3/2)粘土質シルト	56	平瓦片出土。炭化物、粘土粒、礫含む。
72	36×32	黒褐(10YR3/2)シルト	—		36	炭化物、粘土粒含む。
73	38×38	黒褐(10YR3/2)シルト	18×17	暗褐(10YR3/3)シルト	33	粘土粒含む。
74	33×30	黒褐(10YR3/2)シルト	—		41	平瓦片出土。炭化物、礫含む。
75	47×47	黒褐(10YR3/2)シルト	—		53	炭化物、粘土塊、礫含む。
78	51×46	暗褐(10YR3/4)シルト)	—		44	平瓦・丸瓦片出土。粘土塊含む。
79	47×32	明黄褐(10YR6/6)粘土 暗褐(10YR3/3)粘土質シルト	22×22	黒褐(10YR3/2)シルト	29	瓦片、中世陶器片出土

重弁蓮華文軒丸瓦（第12図１～６）は、破片も含めて15点出土している。分類可能なものは７点あり、第１類が４点、第３類が３点である。F－２、３（第12図２、３）は、第１類で、SX－２の底面から出土している。第１類は、花弁の弁端が盛り上がり、中房上の蓮子が１個の珠文を中心に４個の小花弁状のものが十字形に配されている。これらは、同笵であると考えられ、瓦当直径は各々20.7cm、21.7cm である。F－１（第12図１）は、第３類でⅣ区の表土から出土している。第３類は、第１類と類似するが、中房が著しく突出し、中房上の蓮子が五個共円形になっている。また、蓮子を結ぶ線の延長は、蓮弁の中心線ではなく、蓮弁と蓮弁との間の線と一致している。瓦当直径は、20.5cm である。

細弁蓮華文軒丸瓦（第12図７、８）は、破片を含めて５点出土している。F－７（第12図７）は、外区は欠落しているが第１類と思われる。12葉の細い花弁、中央に二重輪郭による内区を有し、その中央に蓮子を１個配している。F－８（第12図８）は、外区の珠文の間隔、花弁の間隔から、外区に21個の珠文を配し、20葉の細い花弁を有する第２類であると考えられる。

歯車文軒丸瓦（第12図９）は、１点のみピット１から出土している。８個の舌状の文様が歯車状に並び、中央に大型の蓮子が配されている。瓦当直径は18cm である。

軒平瓦

合計24点出土している。種類は、重弧文、偏行唐草文、均整唐草文、三重波文、その他に瓦当面が剝落して種類の不明なものがある。

重弧文軒平瓦（第13図11～15、第14図23）は、破片を含めて６点出土している。G－１～５（第13図１～５）は、第１類で、SX－２の底面及び堆積土中から出土している。瓦当面に二重の太い沈線が描かれ、顎部は深顎で、２本の太い平行沈線と、山形文が描かれている。顎部末端の平行沈線は、山形文より先行して描かれている。G－１、２、４の凸面には平行叩き目が施されている。G－13（第14図23）は、第２類で、瓦当面の文様は第１類と同様であるが、顎面に山形文の代わりに、太い沈線による唐草文が描かれている。

偏行唐草文軒平瓦（第13図16～18、第14図19～21）は、破片を含めて８点出土している。小破片１点を除いて、全て第２類である。渦状に左から右に走る唐草文を太い隆線で表わし、その上下に細い隆線でつづられた珠文を配している。顎部は深顎で無文である。G－10 顎部凸面にはおよそ6cm の幅で朱が付着しているのが認められる。

均整唐草文軒平瓦（第14図22）は、１点のみ SX－２の堆積土中から出土している。第２類である。瓦当面の唐草文は、陰刻か陽刻かはっきりしない。顎は有段で、縄叩き目の後スリケシが施されている。

三重波文軒平瓦（第14図24）は、１点のみ SX－２の堆積土中から出土している。沈線による三重の波文が施されている。顎は有段で、縄叩き目の後にスリケシが施されている。

その他に、G－15、16（第14図25、26）のように、瓦当面は剝落しており、種類は不明であるが、顎部に横位の縄叩き目の後に、丸味を帯びた篦状の工具による波状文が描かれているものがある。また、G－15の瓦当面剝落部分に縄叩き目がみられる他、瓦当面剝落部分に格子状に沈線が施されているものもみられる。

丸瓦

丸瓦（第15図、16図）は、小破片も含めて多量に出土している。全て玉縁付の有段丸瓦であり、玉縁の付かない行基瓦はみられない。粘土紐桶巻き作りであり、粘土紐の幅は2～4,5cmのものがある。凸面には、縄叩きの後、ほぼ全面にナデ調整あるいはロクロナデ調整が施されている。凹面には、全点布目痕がみられ、粘土紐の痕跡もみられる。布の合わせ目や、紐の圧痕がみられるものがあり、中には、それらをナデ消しているものもある。玉縁部も筒部と同じ調整がみられる。筒部と玉縁部は一体として作られ、粘土紐の太さの違いによって、玉縁部の段をつくり出していたものと、筒部に粘土を加えて段をつくり出したものが認められるようである。側面と小口面にはヘラケズリが施されている。F－11（第15図27）は、軒丸瓦の瓦当部が剝落したものであるが、筒部の先端中央部に、縄あるいは藁のような植物の圧痕がみられる。これは、軒丸瓦の項では触れなかったが、重弁蓮華文軒丸瓦の同部分にも観察される。また、F－20（第15図29）の凸面中央部に「伊」の刻印文字がみられる。

平瓦

平瓦（第17～19図）は、出土遺物中、小破片も含めて最も多量に出土している。凹面に模骨痕がみられ、桶巻き作りであることが判るものもある。凸面は、縦方向に縄叩きされているものが多いが、斜方向のもの、横方向のものもみられ、それらをスリケシているものもある。また、縄叩き目の他に、平行叩き目や平行叩きの後に一部スリケシているものやG－33（第25図85）のような格子叩き目のもの[註)]，全体にナデ調整されて叩きの不明なもの、布目の痕跡がみられるものがある。凹面は、目の細い布目が多く、全体的にスリケシされたものが多いが、粗い布目のもの、スリケシされていないものもみられる。また、糸切り痕が放射状に残っているものもある。側面と小口面にはヘラケズリが施されている。G－17（第17図37）は、内面に他の瓦を乗せる台にした際に付いたと思われる痕跡様のものが見られることから、焼台に使用したものである可能性もある。また、G－24（第19図34）は、凹面中央部に「物」の刻印文字がみられる。

註）この「格子叩き目」については、「稲妻状叩き目」という呼称で用いられる場合もある。

道具瓦

熨斗瓦（第20図45～47、21図48）は、SX－2から1点、SX－3から3点の計4点出土している。凸面は縄叩き、凹面は布目で、一部あるいは全体をスリケシしている。H－2（第20図46）を

除いて糸切り痕が残っている。また、H－3（第20図47）は、片側面に切り放しの痕跡がみられ、平瓦を焼成以前に分割したものである。他の3点は、両側面ともにヘラケズリが施されている。

隅平瓦（第21図49～51）は、SX－2から2点、SX－3から1点の計3点出土している。いずれも平瓦の隅を焼成以前に切り落したものである。凸面は、H－5（第21図49）は、全面スリケシ、6（同50）は、平行叩き目、7（同51）は、縄叩き目が交叉している。凹面は各々布目をスリケシており、特にH－5は全面がスリケシされている。H－5、6は、各々左隅を切っており、先端の角度は、40°及び37°程度と推定される。H－7は、右隅を切っているが左側面の端部付近にもケズリ調整を入れている。先端の角度は63°である。

文字瓦

文字瓦は、SX－2から6点、SX－3から8点、表土から2点の合計16点が出土している。文字のあらわし方には、刻印を押したもの、指先で書いたもの、篦状工具で書いたものの、3種類がある。

刻印文字瓦（第15図29、第19図44、第22図52～61、63）は14点出土しており、判読できるのは、図示した12点である。「物」、「丸」、「田」、「占」、「伊」の5種類がある。刻印されている瓦には、平瓦と丸瓦がある。平瓦では凸面、凹面の両面に刻印されている。G－24～28（第19図44、第22図52～55）は、凹面に「物」と刻印されており、各々同笵であると考えられる。G－29～31（第22図56～58）は、凹面に「丸」と刻印され、G－29、30は同笵であると考えられる。凸面に刻印されたものは、剝落のため判読できない。丸瓦では、筒部凸面に刻印されており、凹面、玉縁部に刻印されたものはなかった。F－20、21（第22図59、60）は、「田」と刻印され、同笵であると考えられる。F－23（第22図61）、F－20（第22図63は第15図29の部分）は、各々「占」、「伊」が刻印されている。

指書文字瓦は、1点のみ出土している。平瓦の凹面に指書されているが、判読不明であるため図示していない。

篦書文字瓦は、1点のみ出土している。平瓦の凹面に篦状工具によって書かれている。「大」あるいは「木」かと思われるが判定できない。

その他の文様瓦

丸瓦の凸面に篦状の工具で沈線が施されているものである。破片であり、断片的なものであるが、F－25（第22図64）は、平行沈線と、それぞれに直交する沈線で「十」と書かれている。また図示していないが、平行沈線と、それに直交する沈線で「卄」と書かれたものがある。

その他の瓦

その他の瓦は、表土から出土している。軒丸瓦F－10（第12図10）は、瓦当面に右巻きの巴文と、巴文の周囲をとりまく連珠がみられる。その他、図示していないが、F－10と同様の巴文軒

丸瓦片、丸瓦・平瓦片が出土している。これらの瓦は、燻し瓦であり、黒色あるいは、銀色を呈している。その特徴から近世以降の瓦であると考えられる。国分尼寺が曹洞宗に転宗した以降のものであると考えられる。

⑵　土師器

土師器は、基本層１～４層（表土として一括した。）、SX－２、SX－３、ピット等から出土している。出土量は少なく、図示しえたのは、SX－２から出した２点のみである。（第23図76）は、坏で底部から体部下半にかけて残存している。内外面ともロクロ調整が施されており、底部の切り離しは回転糸切りによるもので、切り離し後は無調整である。（第23図77）は、坏で体部はやや内弯しながら外傾し、口縁部で若干外反している。底部の切り離しは、回転糸切りによるもので、切り離し後は無調整である。その他に、坏、高台付坏、甕、把手などがある。全て小破片であるが、磨滅して不明なもの以外は、全て成形時にロクロを使用したものであり、坏では、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されているものもみられる。

⑶　須恵器

須恵器は、基本層１～４層（表土として一括した。）、SX－２から出土している。出土量は少なく、図示しえたものはない。甕あるいは壺の体部及び蓋の宝珠つまみがある。

⑷　中世陶器

中世陶器は、基本層１～４層（表土として一括した。）、SK－１、SK－２、SX－２、SX－３、ピット等から出土している出土量が少なく、甕、壺、練り鉢があるが、全て破片である。大部分が県内産のもので、常滑産のものが１点だけ認められた。県内産の甕（第24図78、79）の２点は同一個体であると考えられる。また、常滑産の甕片（第24図81）には、押印がみられる。年代的には、13世紀から14世紀、鎌倉から南北朝期のものであると考えられる。

⑸　近世陶磁器

近世の陶磁器には、陶器、磁器、カワラケ、瓦質土器等がある。全て基本層１、２層（表土として一括した。）から出土している。瓦以外の出土遺物の中では最も出土量が多くなっている。図示したものは、13点である。陶器及び磁器には碗（第23図65～70）、皿（同71～73）がある。産地は相馬及び肥前のものがある。年代的には、およそ18世紀頃のものであると考えられる。カワラケは、２点図示した（第23図74、75）。内外面ともロクロ調整が施されている。底部は、74は回転ヘラケズリが施され、75は回転糸切り痕がある。瓦質土器は、擂鉢２点を図示した（第24図83、84）。83は６本単位の筋目があり、84は片口が付けられ、７本単位の筋目が付けられている。年代的には近世以降であると思われる。

⑹　鉄製品・鉄滓

鉄製品はSK－２、SX－２、ピット等から出土している。６点出土しており、刀子、釘など

であると考えられるが錆化が著しく詳細は不明であり、図示していない。その他、SX－2出土のもので、鉄の板状のものが重なった状態で錆びついたものがある。鉄滓はSX－2からまとめて出土している。鍛冶滓であると考えられ、総重量は5122gである。これらの鉄滓は、その形状から碗形滓と呼ばれるものであり、木炭の痕跡や、小礫、窯壁の一部と考えられる粘土等が付着しているものもみられる。また、羽口の破片も出土している。

(7) 石製品

ピット及び表土から各々1点づつ砥石が出土している。破損品であり、時期の特定も困難であり、図示していない。

6．まとめ

1．今回の調査では、古代まで遡ると考えられる遺構は、SX－2不明遺構1基のみであり、他の遺構については、中世あるいは近世以降のものであると考えられる。特に小柱穴・ピット群については、古代の陸奥国分尼寺倒壊後の建物跡であることが考えられる。また、SX－2不明遺構からは、多量の鉄滓や、羽口片などが出土し、付近に鍛冶に関連する遺構が存在していることが考えられる。

2．当初想定されていた、陸奥国分尼寺の南辺を区画すると考えられる遺構は、今回の調査では検出されなかった。このことから、陸奥国分尼寺の伽藍配置はもとより、明らかになっていない寺域範囲についても、再度検討しなおす必要があると考えられる。これらを今後の課題とし、著しい都市化によって、ますます発掘調査の実施が困難な状況になる本遺跡周辺地区においては、計画的に調査を進めて行くことが急務であると考えられる。

引用・参考文献

仙台市教育委員会　1969『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市文化財報告書第4集

陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　1961『陸奥国分寺跡』

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所　1980『多賀城跡　政庁跡図録編』

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所　1982『多賀城跡　政庁跡本文編』

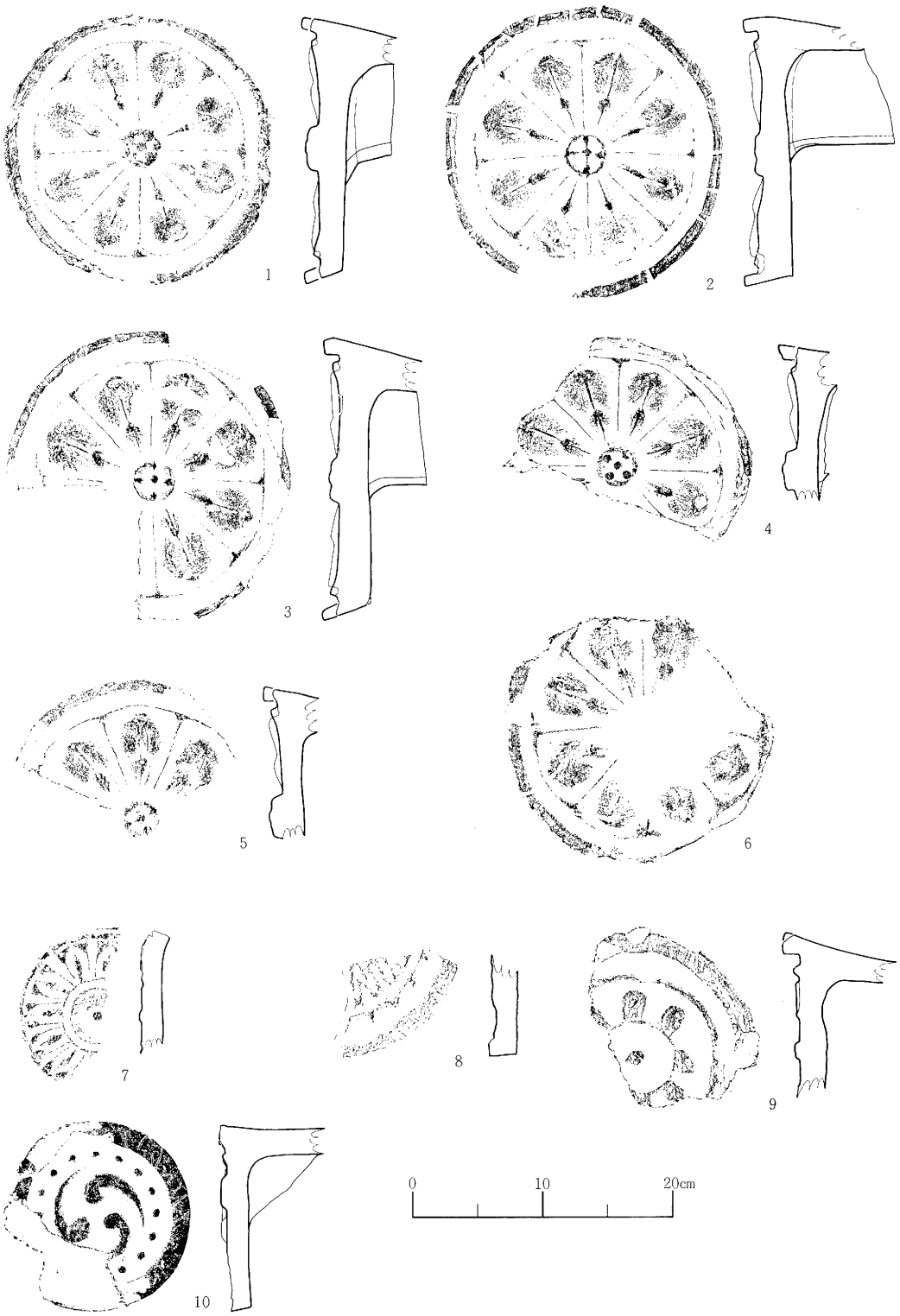
佐賀県立九州陶磁文化館　1984『国内出土の肥前陶磁』

仙台市教育委員会　1984『史跡陸奥国分寺跡　昭和58年度環境整備予備調査概報 南大門跡東脇築地跡』仙台市文化財調査報告書第63集

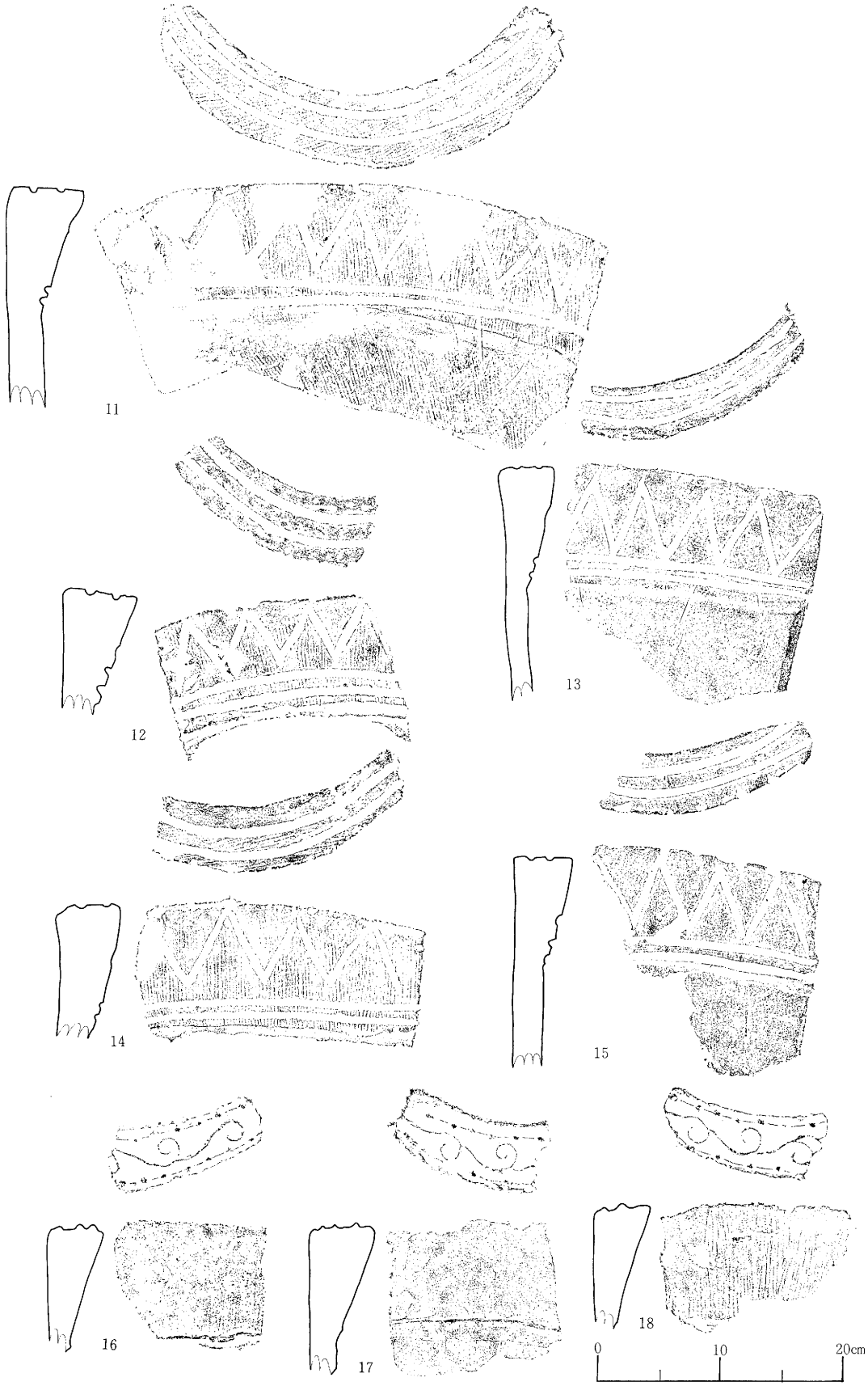
仙台市教育委員会　1985『仙台平野の遺跡群Ⅳ―昭和59年度発掘調査報告』仙台市文化財調査報告書第75集

仙台市教育委員会　1986『仙台平野の遺跡群Ⅴ―昭和60年度発掘調査報告』仙台市文化財調査報告書第87集

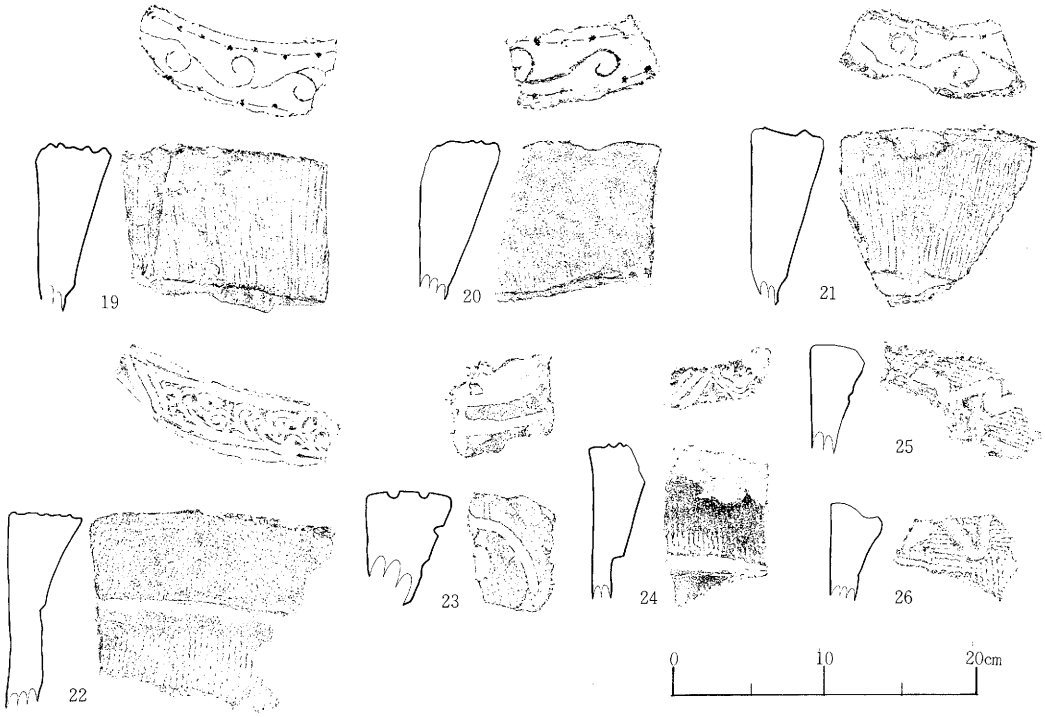
仙台市教育委員会　1987『仙台平野の遺跡群Ⅵ―昭和61年度発掘調査報告』仙台市文化財調査報告書第97集



第12図　軒　丸　瓦



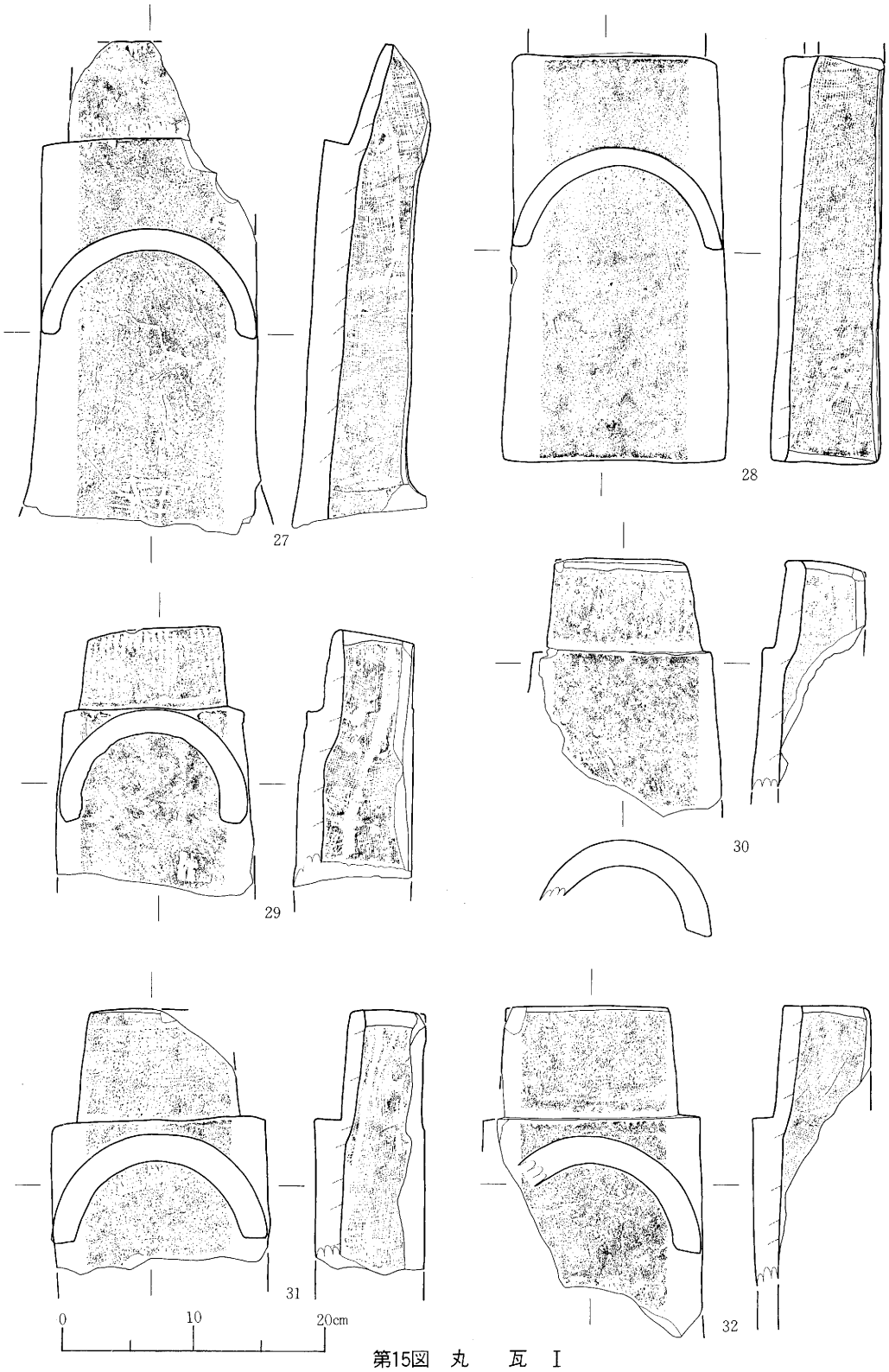
第13図　軒 平 瓦 Ⅰ



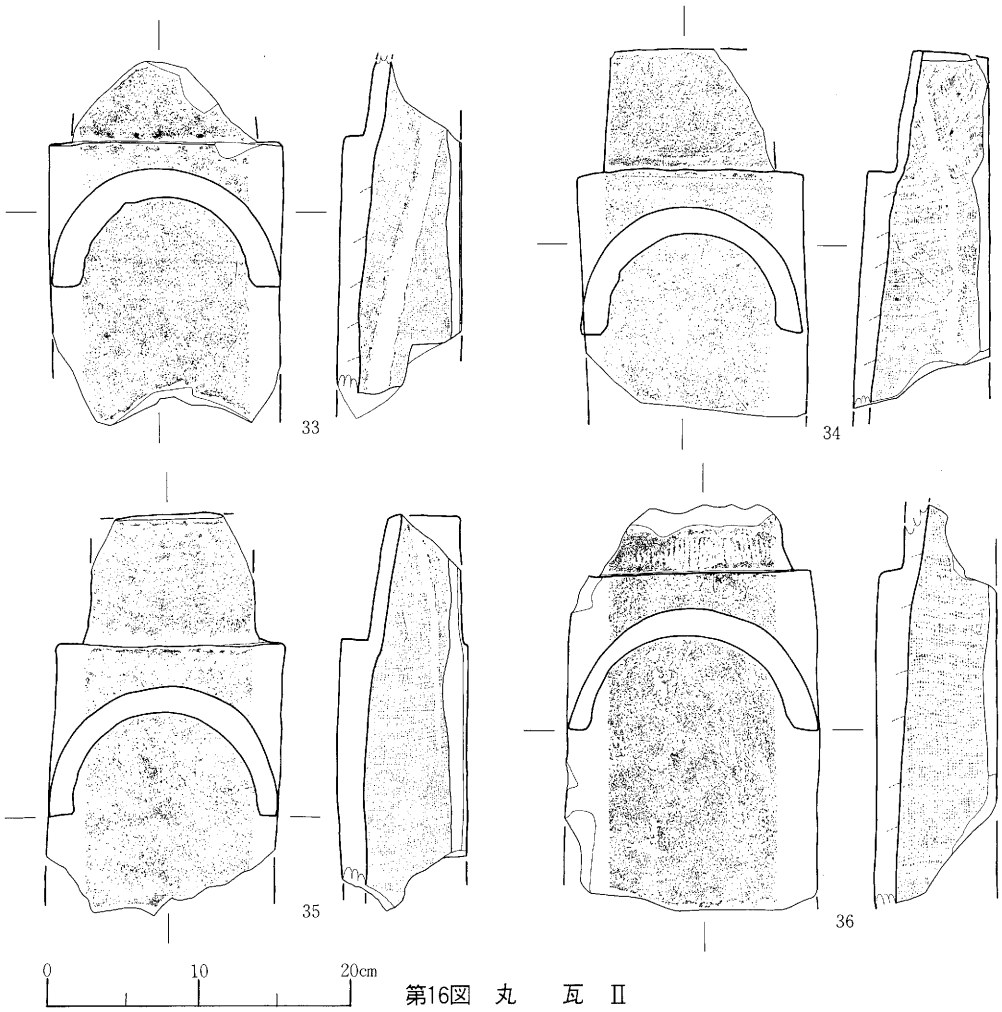
第14図　軒 平 瓦 Ⅱ

表４　軒丸瓦、軒平瓦観察表

図版番号	種　類	特　　徴	地町・遺構・層位	写真図版・登録番号
12 — 1	軒丸瓦	重弁蓮華文第３類	Ⅵ区　表土	11—1　F—1
12 — 2	軒丸瓦	重弁蓮華文第１類	ＳＸ—２　底面	11—2　F—2
12 — 3	軒丸瓦	重弁蓮華文第１類	ＳＸ—２　底面	11—3　F—3
12 — 4	軒丸瓦	重弁蓮華文第３類	ＳＸ—２　１層	11—4　F—4
12 — 5	軒丸瓦	重弁蓮華文第１類	ＳＸ—２　６層	11—5　F—5
12 — 6	軒丸瓦	重弁蓮華文第１類？	ＳＸ—２　底面	11—6　F—6
12 — 7	軒丸瓦	細弁蓮華文第１類	ＳＸ—２　１層	12—1　F—7
12 — 8	軒丸瓦	細弁蓮華文第２類	ＳＸ—３　１層	12—2　F—8
12 — 9	軒丸瓦	歯車文	Pit　1　１層	12—3　F—9
12 — 10	軒丸瓦	三巴文・近世	Ⅲ区　表土	12—4　F—10
13 — 11	軒平瓦	重弧文第１類、顎部に山形文と２本平行線	ＳＸ—２　底面	13—1　G—1
13 — 12	軒平瓦	重弧文第１類、顎部に山形文と２本平行線	ＳＸ—２　底面	13—2　G—2
13 — 13	軒平瓦	重弧文第１類、顎部に山形文と２本平行線	ＳＸ—２　６層	13—3　G—3
13 — 14	軒平瓦	重弧文第１類、顎部に山形文と２本平行線	ＳＸ—２　５層	13—4　G—4
13 — 15	軒平瓦	重弧文第２類、顎部に山形文と２本平行線	ＳＸ—２　底面	14—1　G—5
13 — 16	軒平瓦	偏行唐草文第２類	ＳＸ—２　１層	14—2　G—6
13 — 17	軒平瓦	偏行唐草文第２類	表土	14—3　G—7
13 — 18	軒平瓦	偏行唐草文第２類	ＳＸ—２　１層	14—4　G—8
14 — 19	軒平瓦	偏行唐草文第２類	Ⅲ区Pit 10	15—1　G—9
14 — 20	軒平瓦	偏行唐草文第２類	Ⅰ区　表土	15—2　G—10
14 — 21	軒平瓦	偏行唐草文第２類	Ⅲ区　表土	15—3　G—11
14 — 22	軒平瓦	均整唐草文第２類	ＳＸ—２　１層	15—4　G—12
14 — 23	軒平瓦	重弧文第２類、顎部に唐草文	Ⅲ区　表土	16—1　G—13
14 — 24	軒平瓦	三重波文	ＳＸ—２　１層	16—2　G—14
14 — 25	軒平瓦	顎部に波状文	ＳＸ—２　１層	16—3　G—15
14 — 26	軒平瓦	顎部に波状文	ＳＸ—２　１層	16—4　G—16



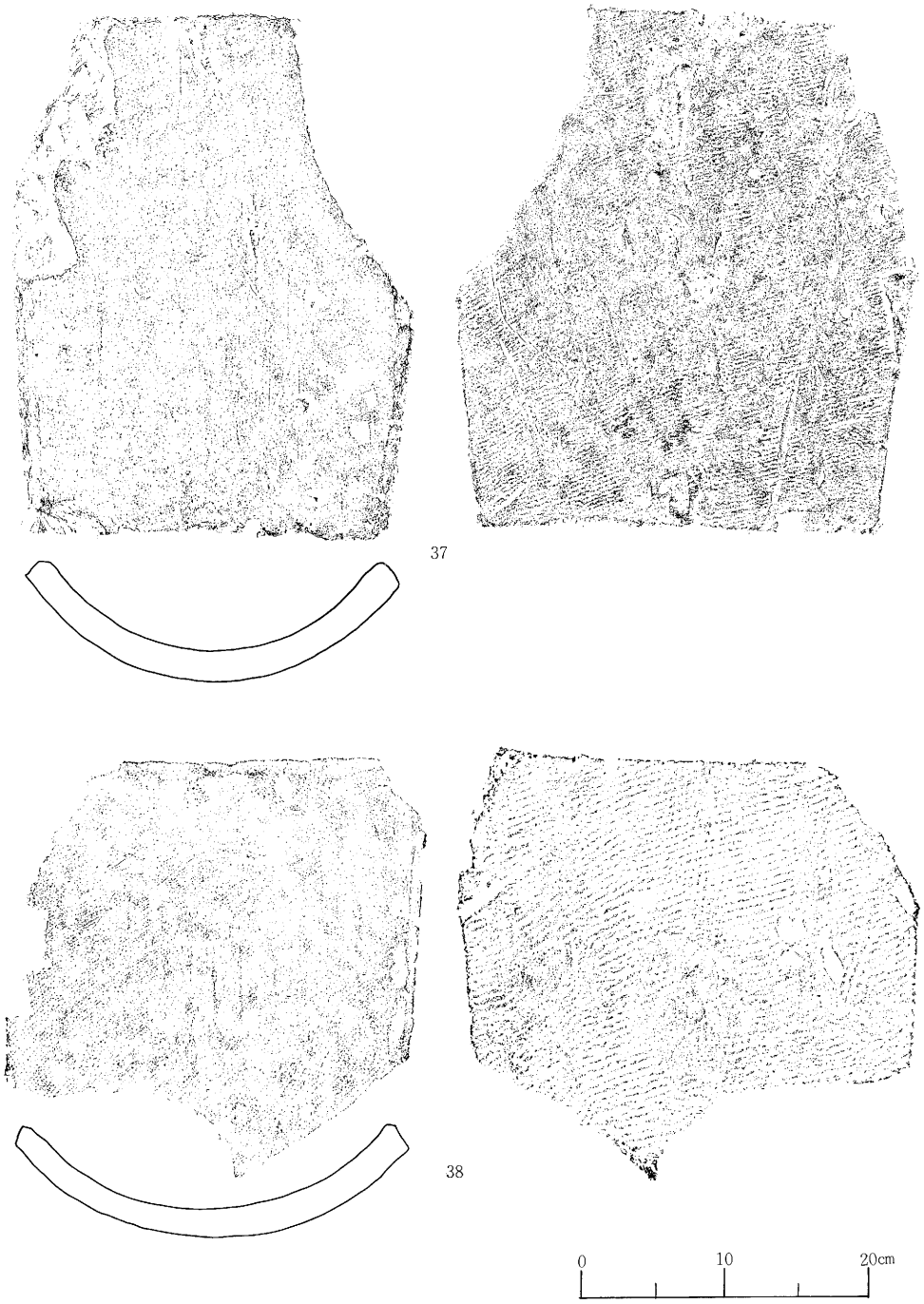
第15図　丸　　瓦　Ⅰ



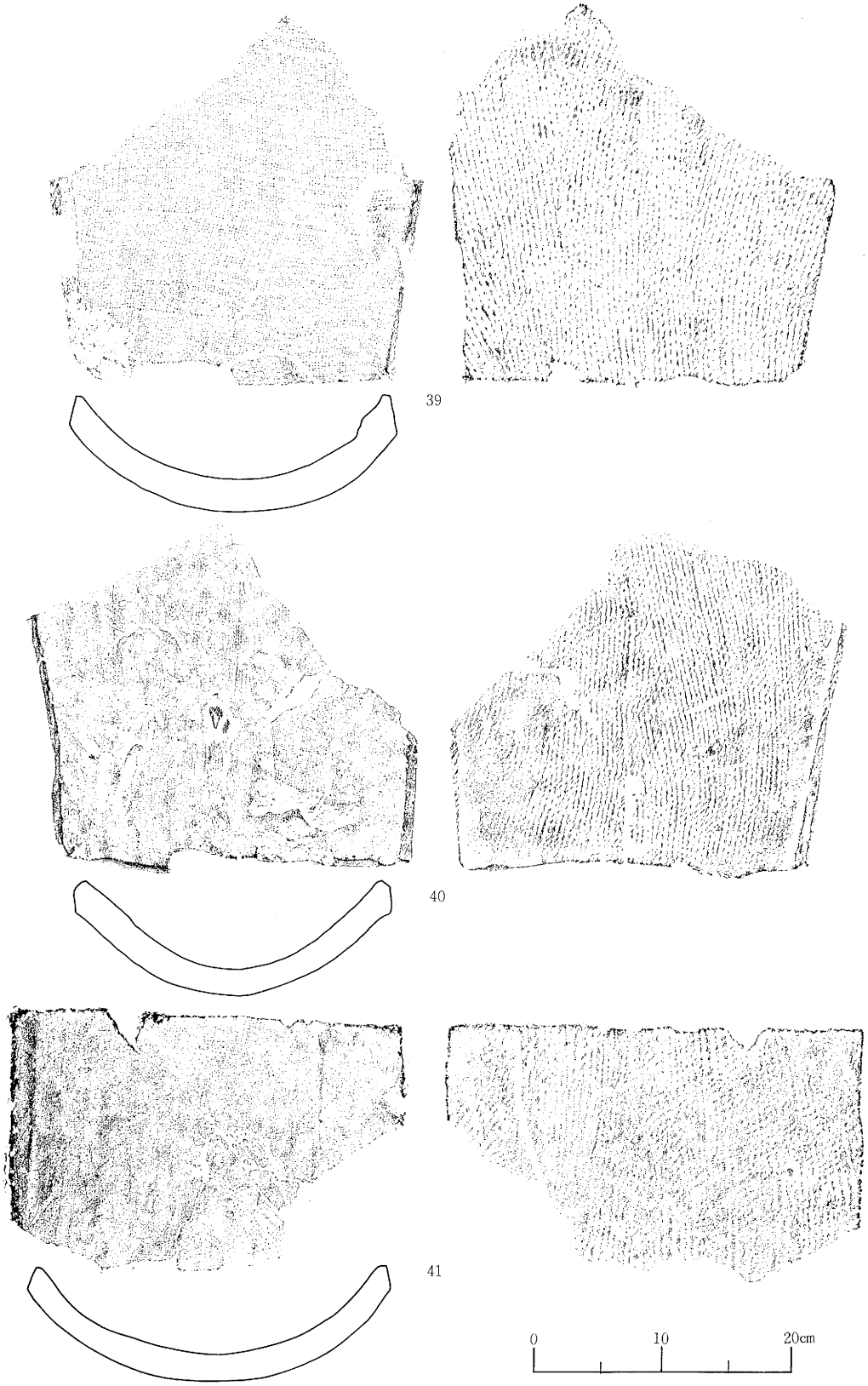
第16図　丸　　瓦 Ⅱ

表５　丸瓦観察表

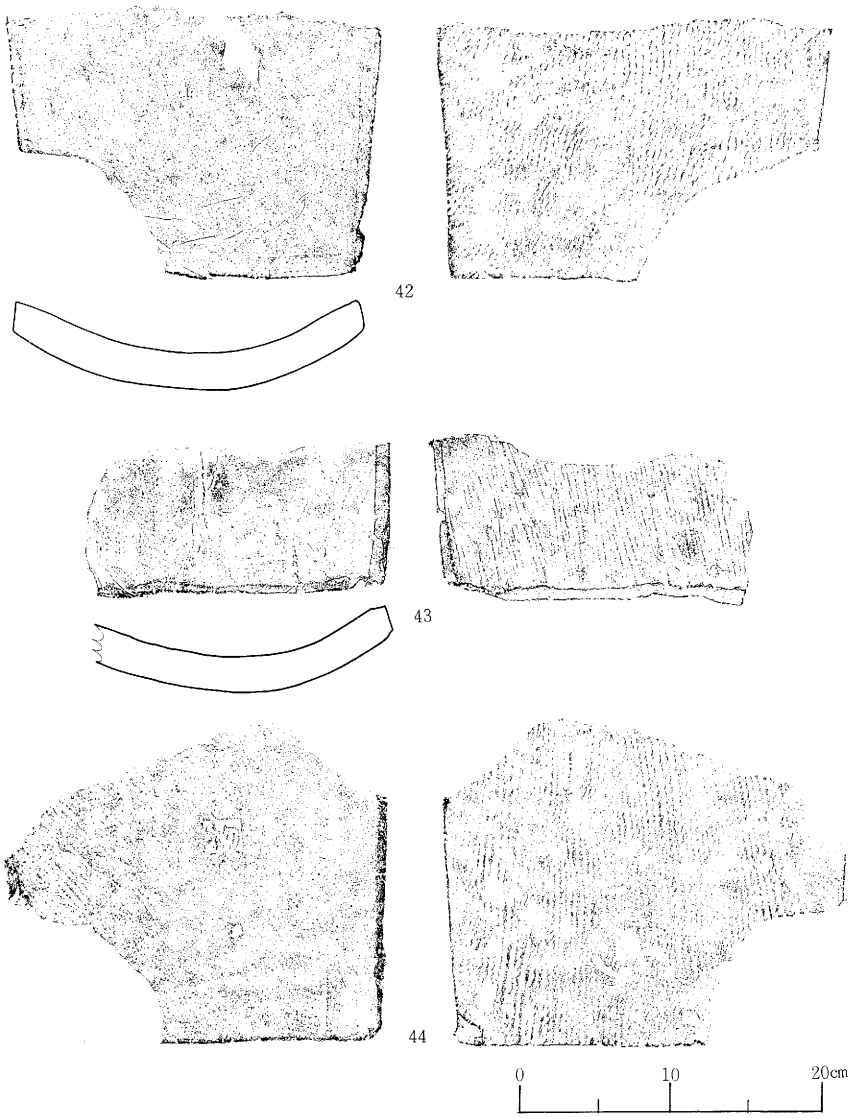
図版番号	種　類	特　　徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
15 — 27	軒丸瓦	瓦当部がとれている、粘土紐桶巻き作り、凹面に紐圧痕	ＳＸ－２　１層	16－５　Ｆ－11
15 — 28	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り	ＳＸ－２　１層	16－６　Ｆ－12
15 — 29	丸　瓦	刻印文字瓦「伊」　凹面に紐圧痕	ＳＸ－２　１層	16－７　Ｆ－20
15 — 30	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り	ＳＸ－２　１層	16－８　Ｆ－19
15 — 31	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り、凹面に紐圧痕	ＳＸ－２　１層	17－１　Ｆ－18
15 — 32	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り	ＳＸ－３　１層	17－２　Ｆ－17
16 — 33	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り　凹面の紐圧痕ナデ消シ	ＳＸ－３　１層	17－３　Ｆ－16
16 — 34	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り、凹面に紐の圧痕	ＳＸ－３　１層	17－４　Ｆ－15
16 — 35	丸　瓦	凹面に紐の圧痕	ＳＸ－３　１層	17－５　Ｆ－14
16 — 36	丸　瓦	粘土紐桶巻き作り	ＳＸ－２　１層	17－６　Ｆ－13



第17図　平　　瓦 I



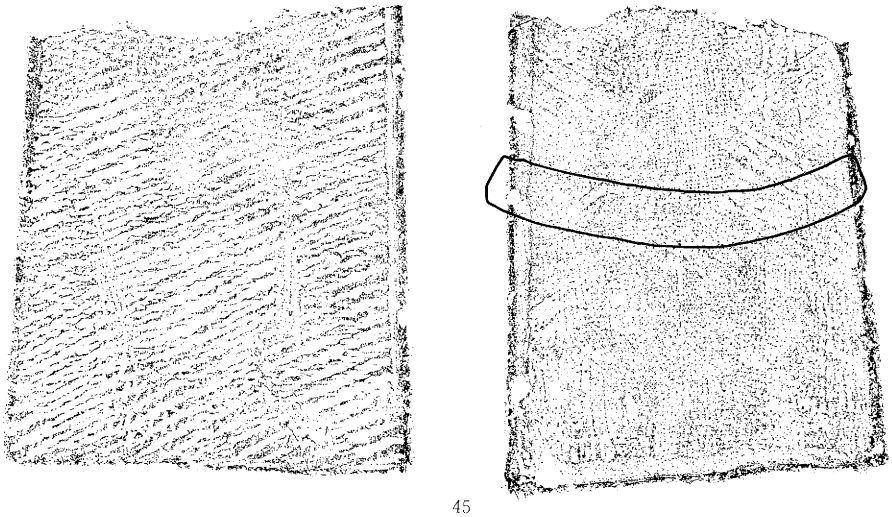
第18図　平　　瓦 Ⅱ



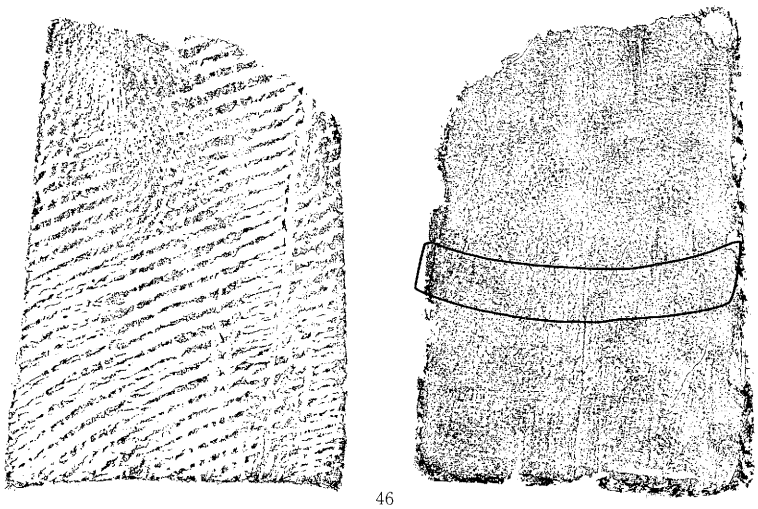
第19図　平　　瓦 Ⅲ

表６　平瓦観察表

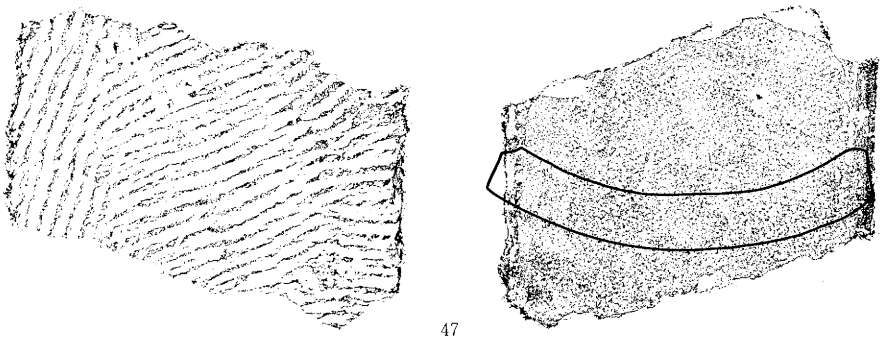
図版番号	種　類	特　　徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
17 — 37	平　瓦	長軸36cm、凹面布目スリ消シ、焼台に使用か	ＳＸ－２　１層	18－１　Ｇ－17
17 — 38	平　瓦	凹面に糸切痕、布目はっきりせず	ＳＸ－３　１層	18－２　Ｇ－18
18 — 39	平　瓦		ＳＸ－２　２層	18－３　Ｇ－19
18 — 40	平　瓦		ＳＸ－３　１層	18－４　Ｇ－20
18 — 41	平　瓦	凹面布目スリ消シ	ＳＸ－３　１層	18－５　Ｇ－21
19 — 42	平　瓦	凹面布目磨耗して不明	ＳＸ－２　１層	18－６　Ｇ－22
19 — 43	平　瓦	凸面に平行叩き、凹面に糸切痕、布目スリ消シ	ＳＸ－２　底面	18－７　Ｇ－23
19 — 44	平　瓦	刻印文字瓦「物」凹面に糸切痕	ＳＸ－３　１層	20－１　Ｇ－24



45



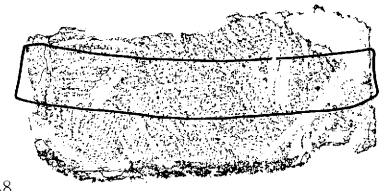
46



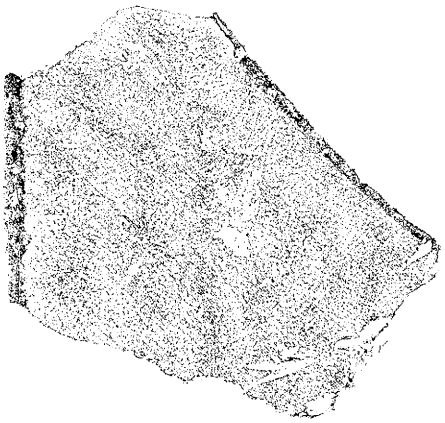
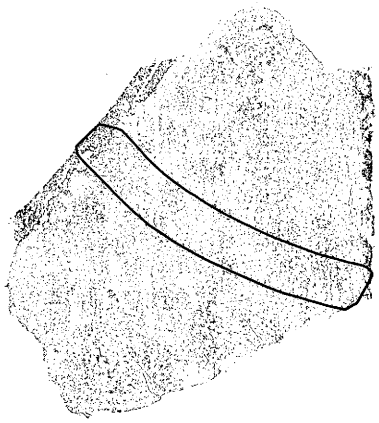
47

0 10cm

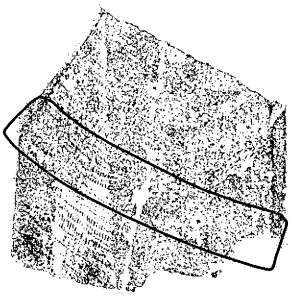
第20図　道 具 瓦 Ⅰ



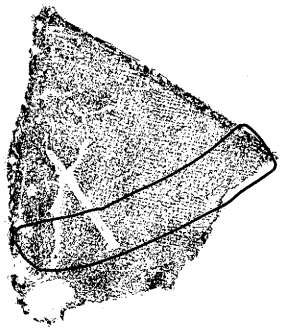
48

49



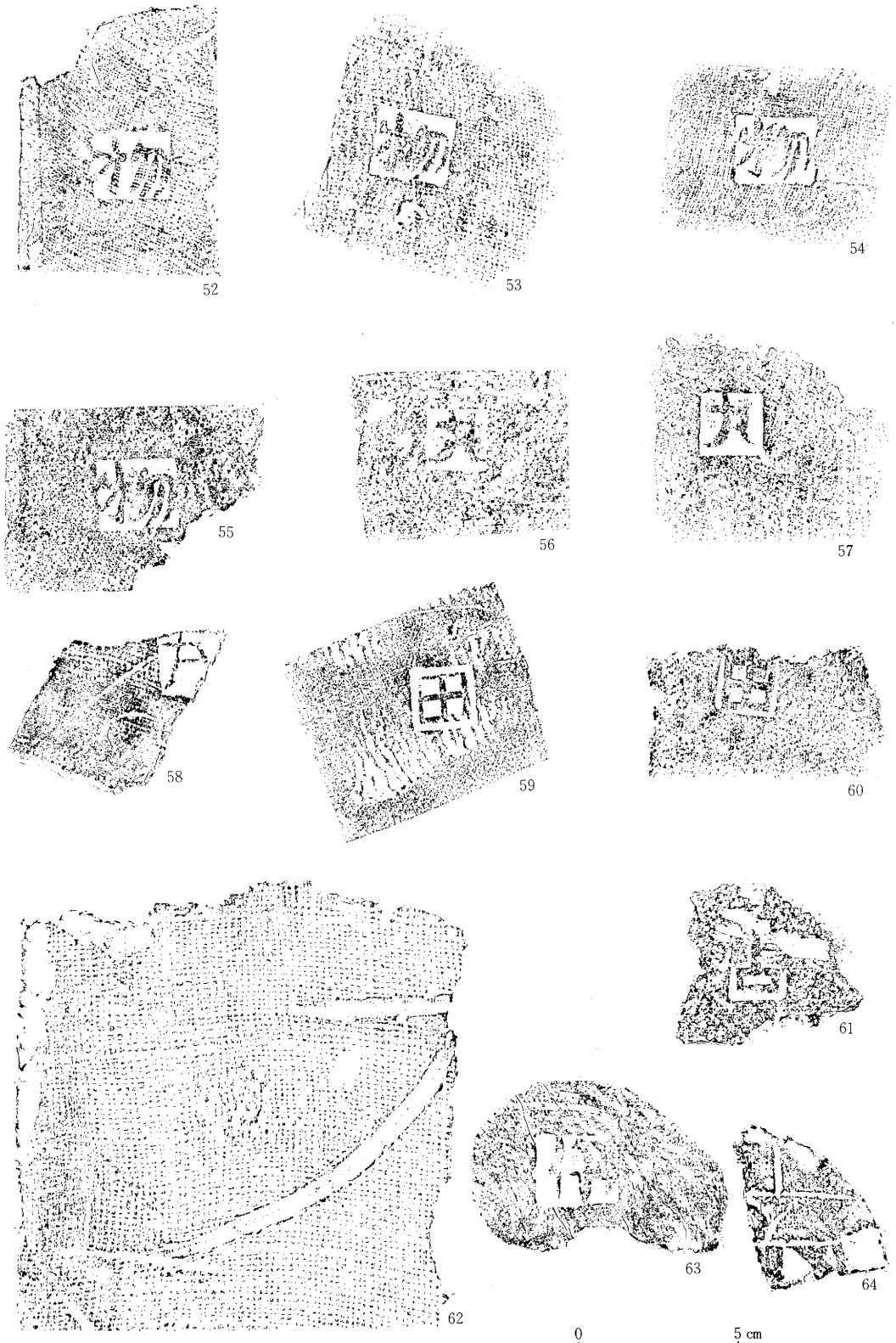
50



51

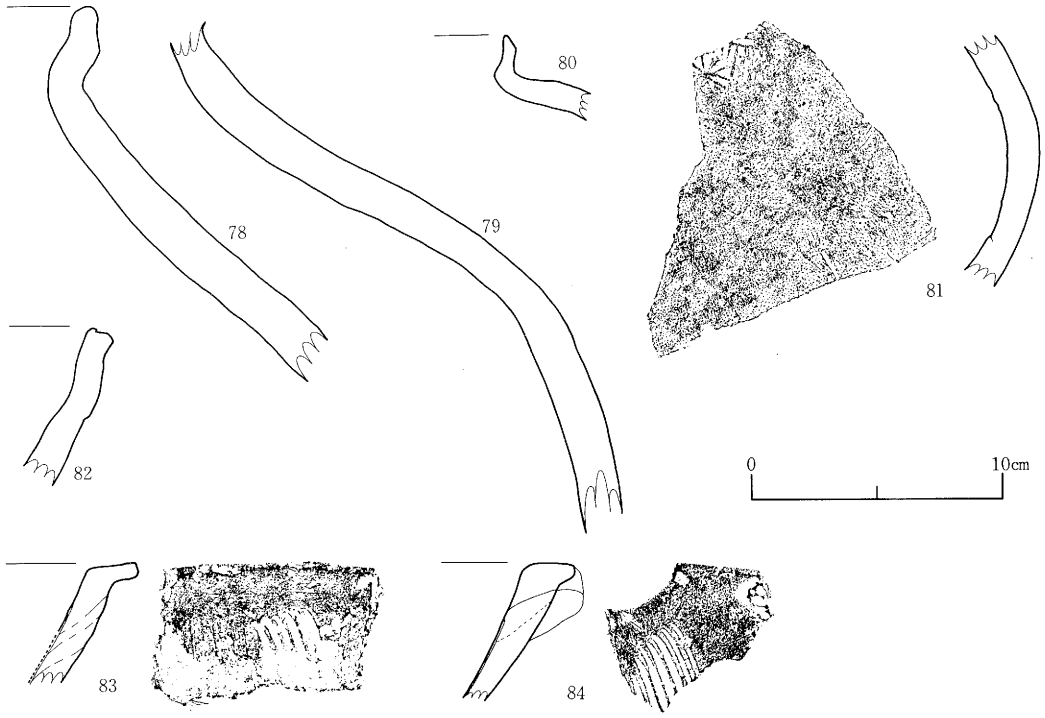
0 10cm

第21図　道 具 瓦 Ⅱ



第22図　文字瓦ほか

第23図　近世陶磁器・カワラケ・土師器



第24図　中世陶器・瓦質土器

表７　道具瓦観察表

図版番号	種　類	特　　徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
20 — 45	熨斗瓦	凹面布目若干スリ消シ	ＳＸ－３　１層	29－１　Ｈ－１
20 — 46	熨斗瓦	凹面布目若干スリ消シ	ＳＸ－３　１層	19－２　Ｈ－２
20 — 47	熨斗瓦	凹面布目スリ消シ、糸切痕アリ	ＳＸ－３　１層	19－３　Ｈ－３
21 — 48	熨斗瓦	凹面糸切痕アリ	ＳＸ－２　１層	19－４　Ｈ－４
21 — 49	隅平瓦	凹凸面ともスリ消シ	ＳＸ－２　４層	19－５　Ｈ－５
21 — 50	隅平瓦	凹面布目スリ消シ、凸面平行叩き目痕	ＳＸ－３　１層	19－６　Ｈ－６
21 — 51	隅平瓦	凸面縄叩き目痕交叉	ＳＸ－２　１層	19－７　Ｈ－７

表８　文字瓦ほか観察表

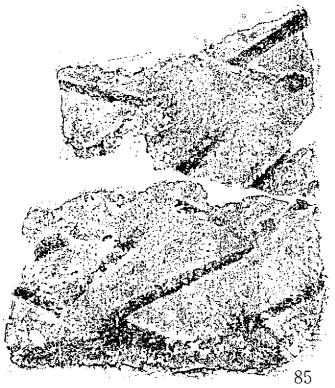
図版番号	種種類類	特　　徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
22 — 52	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」	ＳＸ－３　１層	20－２　Ｇ－25
22 — 53	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」上記と同范	ＳＸ－３　１層	Ｇ－26
22 — 54	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」上記と同范	ＳＸ－２　１層	Ｇ－27
22 — 55	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」上記と同范	ＳＸ－３　１層	Ｇ－28
22 — 56	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「丸」	ＳＸ－３　１層	Ｇ－29
22 — 57	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「丸」上記と同范	１区　表土	20－３　Ｇ－30
22 — 58	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「丸」	ＳＸ－３　１層	20－４　Ｇ－31
22 — 59	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「田」	ＳＸ－２　１層	20－５　Ｆ－21
22 — 60	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「田」上記と同范	ＳＸ－２　１層	Ｆ－22
22 — 61	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「占」	ＳＸ－２　１層	20－６　Ｆ－23
22 — 62	線刻文字瓦	平瓦の凹面に「大」カ「木」カ	Ⅳ区　表土	20－８　Ｇ－32
22 — 63	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「伊」	ＳＸ－２　１層	20－７　Ｆ－20
22 — 64	線刻瓦	丸瓦の凸面に、ヘラ状工具で平行及び直交する沈線	ＳＸ－２　１層	Ｆ－25

表9　近世陶磁器・カワラケ・土師器観察表

図版番号	種類	特　　徴（単位：cm）	地区・遺構・層位	写真図版
23 — 65	陶器碗	器高5.85、口径12.6、底径4.5、内外面灰釉、高台無釉、18C相馬	Ⅲ区　表土	21—1
23 — 66	磁器碗	染付、口径10.6、器高5.4、底径4.0、見込み蛇ノ目釉ハギ、18C肥前	Ⅲ区　表土	21—2
23 — 67	陶器碗	器高5.65、口径10.1、底径4.0、内外面貫入アリ、高台無釉、18C相馬	Ⅲ区　表土	21—3
23 — 68	磁器碗	網目文染付、口径10.0、器高5.1、見込みにコンニャク印版、18C肥前	Ⅲ区　表土	21—4
23 — 69	灰釉碗	底径4.4、内外面貫入アリ、高台無釉、18C相馬	Ⅲ区　表土	
23 — 70	陶器碗	器高5.95、口径7.8、底径3.7、内外面貫入アリ、高台無釉、18C相馬	Ⅲ区　表土	21—5
23 — 71	磁器皿	染付、器高2.2、口径8.8、底径3.0、18C肥前	Ⅲ区　表土	21—6
23 — 72	磁器皿	染付、五弁花コンニャク印版、18C肥前	Ⅲ区　表土	21—7
23 — 73	磁器皿	染付、口径10.2、器高2.6、底径6.0、内面に印版5ケ所高台内くずし銘「福」カ、18C肥前	Ⅲ区　表土	21—8
23 — 74	カワラケ	口径5.6、器高1.95、底径3.4、内外面ロクロ調整、底面回転ヘラケズリ	Ⅲ区　表土	22—1
23 — 75	カワラケ	口径10.4、器高2.65、底径6.4、内外面ロクロ調整、底面回転糸切り	Ⅲ区　表土	22—2
23 — 76	土師器坏	底径4.8、色調浅橙、内外面ロクロ調整、底面回転糸切り	ＳＸ—２　６層	
23 — 77	土師器坏	器高3.1、口径13.7、底径5.1、色調浅黄橙、内外面ロクロ調整、底面回転糸切り	ＳＸ—２　６層	22—3

表10　中世陶器、瓦質土器観察表

図版番号	種　類	特　　徴	地区・遺構・層位	写真図版
24 — 78	中世陶器　甕	灰白色を呈し、胎土に緻密さがない、県内産	ＳＫ—２　１層	22—4
24 — 79	中世陶器　甕	上記と同一個体と考えられる。	ＳＫ—１　１層	22—5
24 — 80	中世陶器　壺	暗赤灰色を呈する。県内産	Ⅲ区　表土	22—6
24 — 81	中世陶器　甕	常滑産、押印あり、表面はにぶい赤褐色、断面は灰黄褐色を呈する。	ＳＸ—２	22—7
24 — 82	中世陶器ねり鉢	にぶい橙色を呈する。県内産	ＳＸ—２	22—8
24 — 83	瓦質土器　擂鉢	近世、筋目６本単位	Ⅳ区　表土	22—9
24 — 84	瓦質土器　擂鉢	近世、片口、筋目７本単位	Ⅲ区　撹乱	22—10



85

第25図　平瓦片

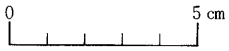


写真１　平瓦片

表11　平瓦片観察表

図版番号	種類	特　　徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
25 — 85	平瓦	凹面布目スリ消シ、凸面格子叩き目痕	Ⅲ区　Pit 1	１—１　Ｇ—33

写真２
ＳＸ－１
（北→）

写真３
ＳＸ－２
（南→）

写真４
ＳＸ－２底面遺物
出土状況
（東→）

写真５
Ⅲ区北東部壁（ＳＸ－２）
断面
（西→）

写真６
ＳＸ－３
（南→）

写真７
ＳＫ－１
（北→）

写真８
ＳＫ－２
（北→）

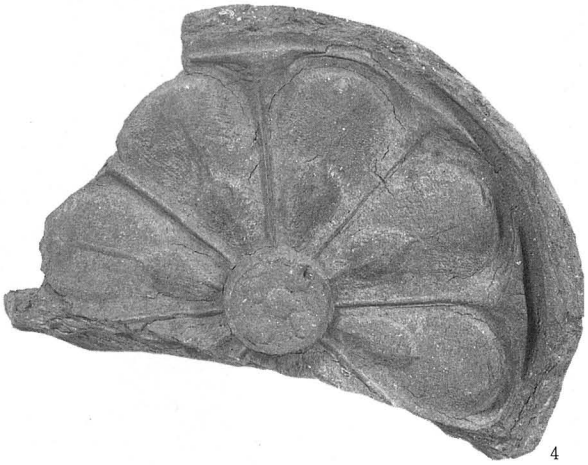
写真９
Ⅲ区西部の
ピット群
（西→）

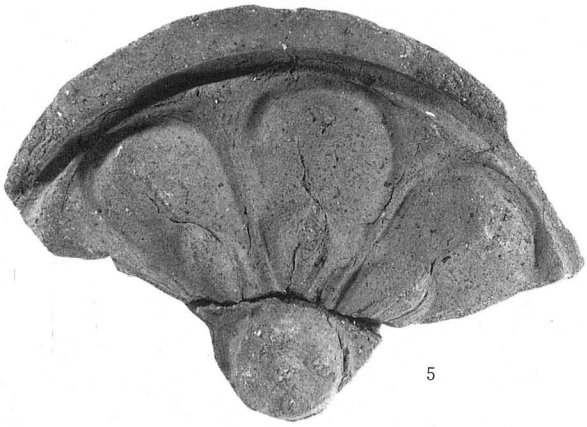
写真10
Ⅲ区ピット１
遺物出土状況
（東→）

1

2

3


4


5

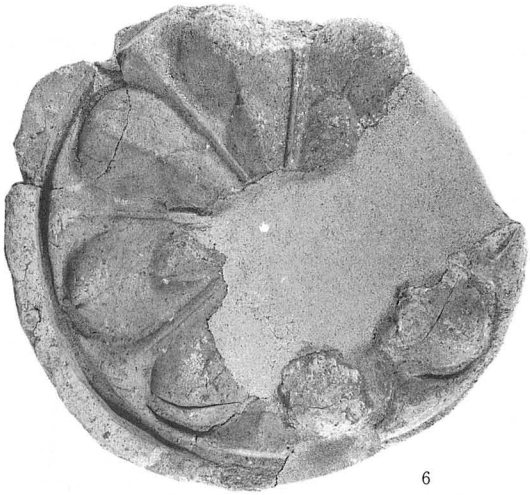
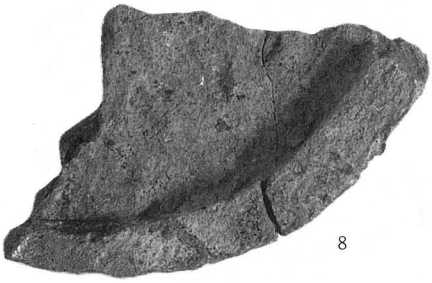

6

写真11　軒丸瓦 I

7

9



8

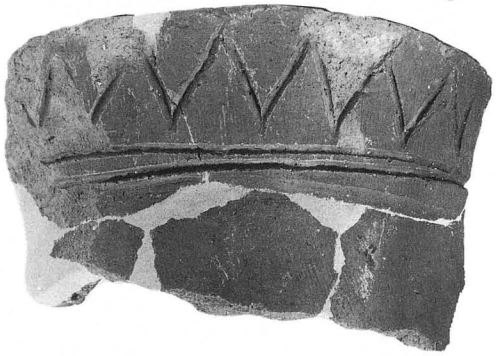
10

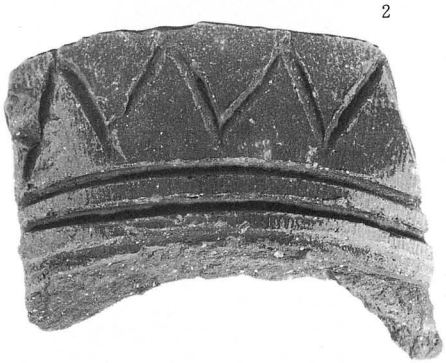
1．F－1重弁蓮華文（第12図1）　2．F－2重弁蓮華文（第12図2）
3．F－3重弁蓮華文（第12図3）　4．F－4重弁蓮華文（第12図4）
5．F－5重弁蓮華文（第12図5）　6．F－6重弁蓮華文（第12図6）
7．F－7細弁蓮華文（第12図7）　8．F－8細弁蓮華文（第12図8）
9．F－9歯　車　文（第12図9）　10．F－9三　巴　文（第12図10）

写真12　軒 丸 瓦 Ⅱ

1

2





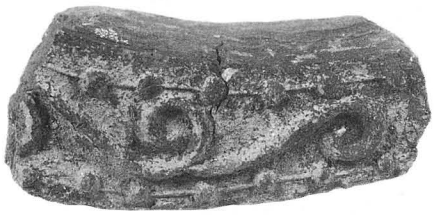
3

4

1．G－1重弧文（第13図11）　2．G－2重弧文（第13図12）
3．G－3重弧文（第13図13）　4．G－4重弧文（第13図14）

写真13　軒平瓦Ⅰ

1



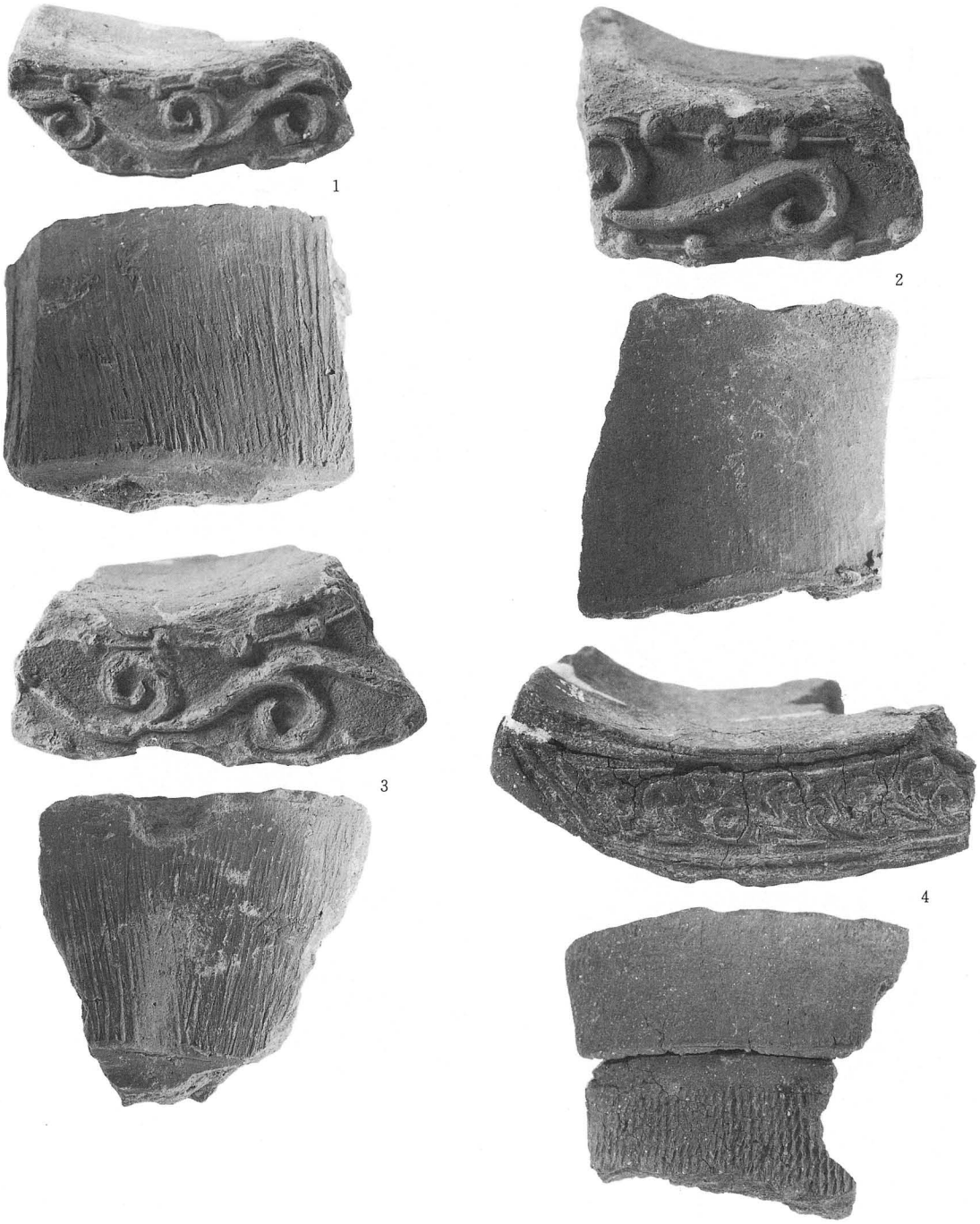
2

3

4

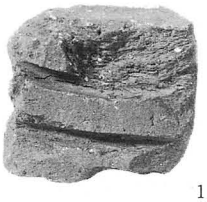
1．G－5重弧文（第13図15）　2．G－6偏行唐草文（第13図16）
3．G－7偏行唐草文（第13図17）　4．G－7偏行唐草文（第13図18）

写真14　軒 平 瓦 Ⅱ



1．G－9偏行唐草文（第14図19）　2．G－10偏行唐草文（第14図20）
3．G－11偏行唐草文（第14図21）　4．G－12均整唐草文（第14図22）

写真15　軒平瓦Ⅲ



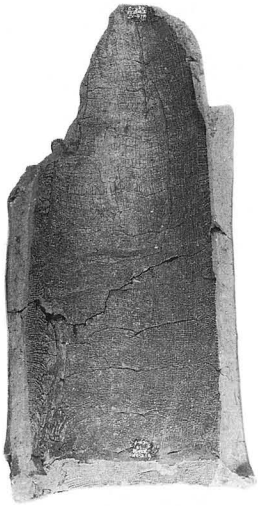
1

2

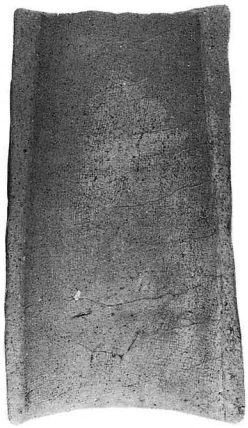
3

4

1．G—13重弧文（第14図23）
2．G—14三重波文（第14図24）
3．G—15波状文（第14図25）
4．G—16波状文（第14図26）



5．F—11（第15図27）

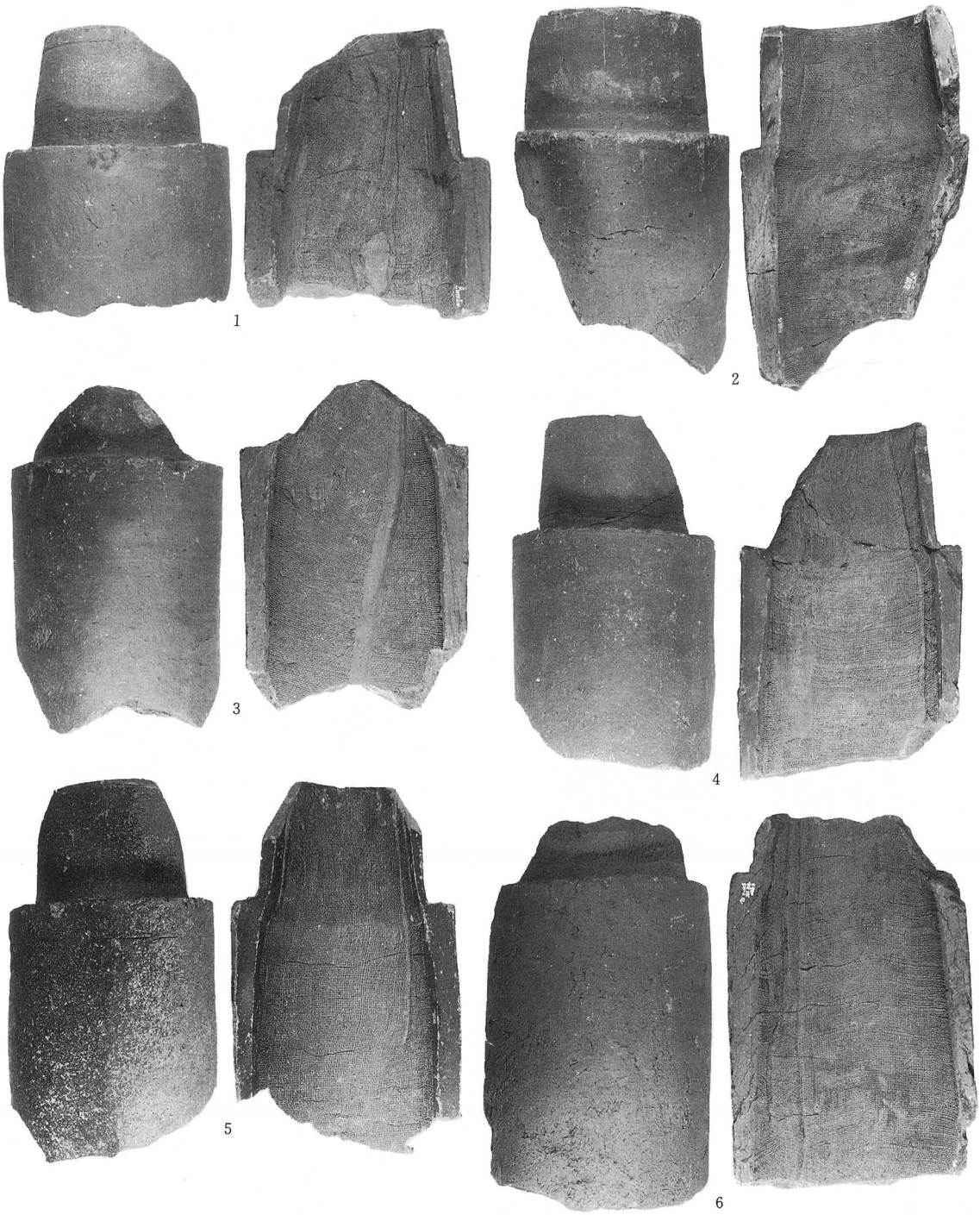


6．F—12（第15図28）

7．F—20（第15図29）

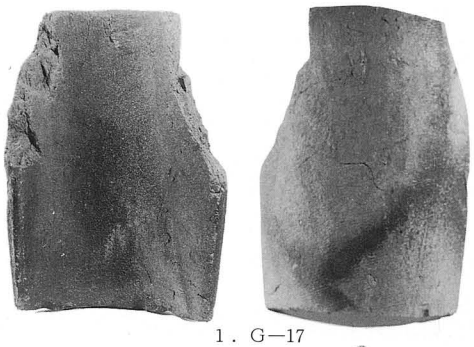
8．F—19（第15図30）

写真16　軒平瓦Ⅳ・丸瓦Ⅰ



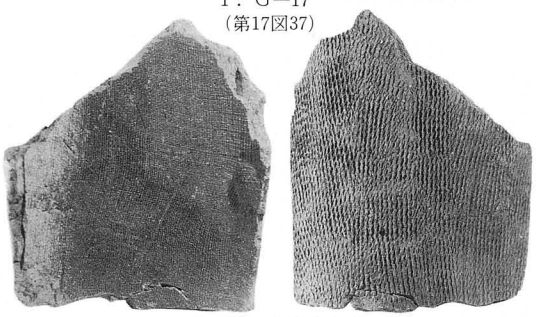
1．F－18（第15図31）　2．F－17（第15図32）　3．F－16（第16図33）
4．F－15（第16図34）　5．F－14（第16図35）　6．F－13（第16図36）

写真17　丸　　瓦 Ⅱ

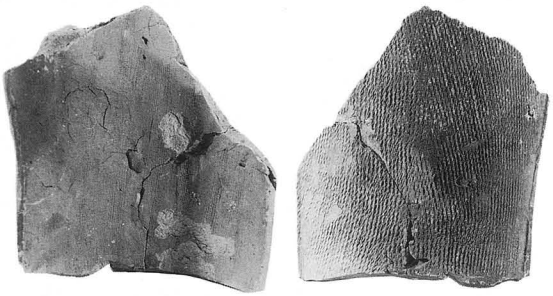


1．G—17
（第17図37）

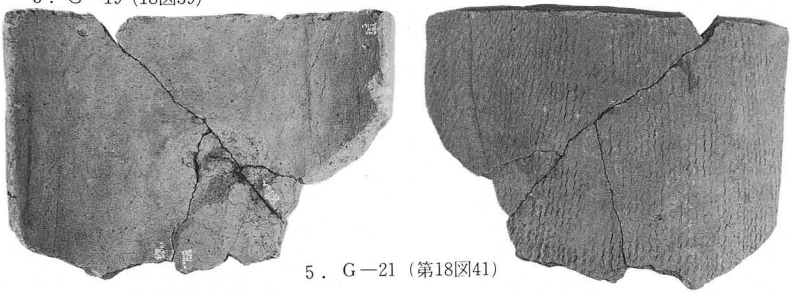
2．G—20（第17図38）



3．G—19（18図39）

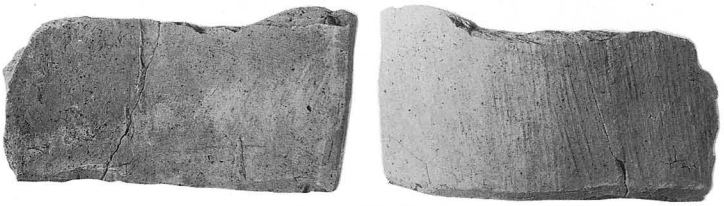


4．G—20（第18図40）



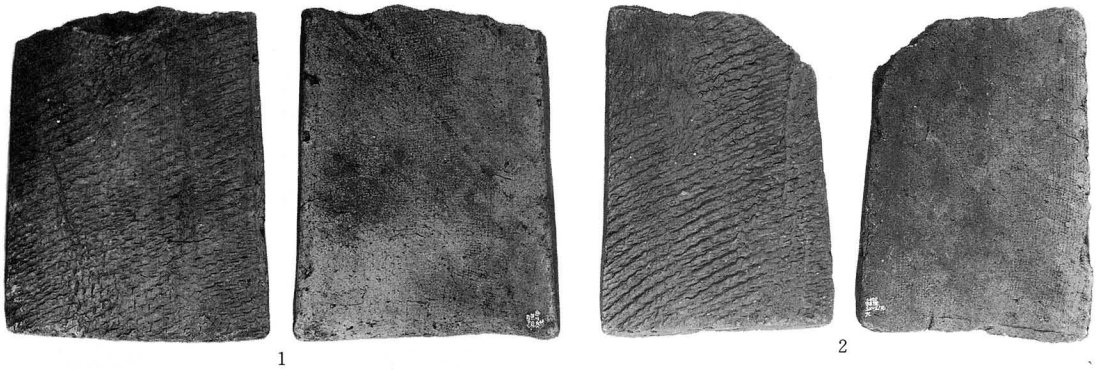
5．G—21（第18図41）

6．G—22（第19図42）



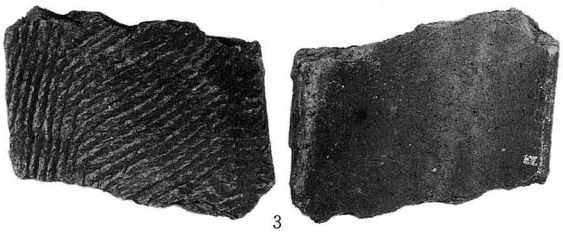
7．G—23（第19図43）

写真18　平　　瓦

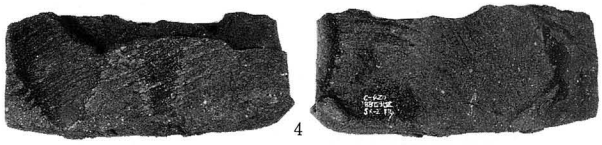


1

2

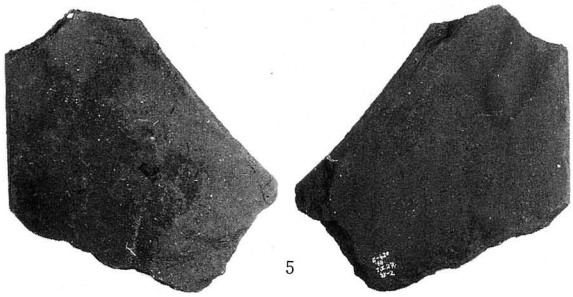


3

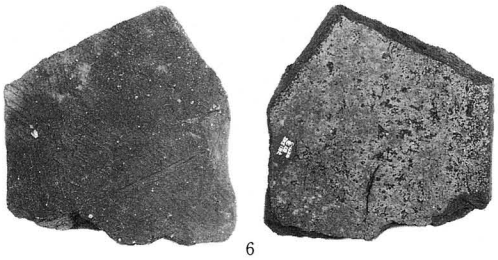


4

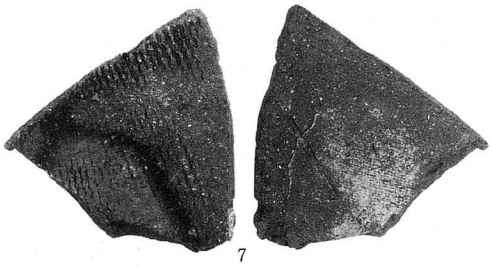
1．H－1 熨斗瓦（第20図45）
2．H－2 熨斗瓦（第20図46）
3．H－3 熨斗瓦（第20図47）
4．H－4 熨斗瓦（第21図48）



5



6



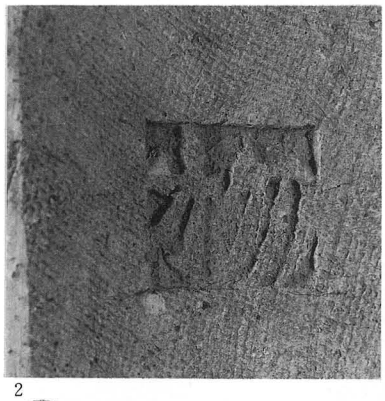
7

5．H－5 隅平瓦（第21図40）
6．H－6 隅平瓦（第21図50）
7．H－7 隅平瓦（第21図51）

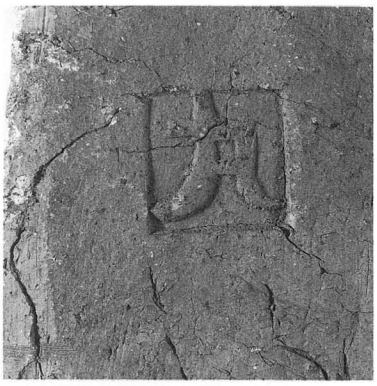
写真19　道　具　瓦

1

G－24（第19図44）

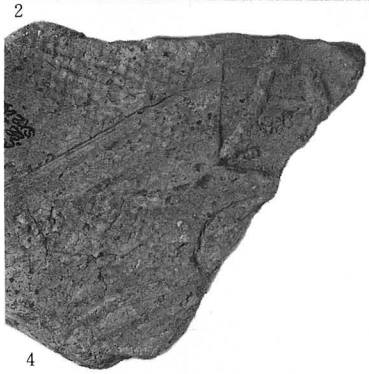


2



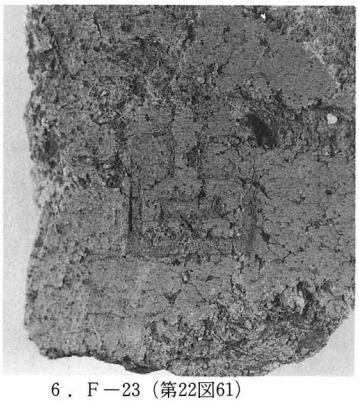
3

2．G－25（第22図52）
3．G－30（第22図57）
4．G－31（第22図58）
5．F－21（第22図59）



4

5

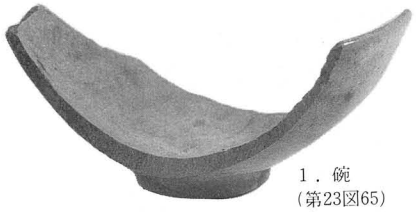


6．F－23（第22図61）

7．F－20（第22図63）

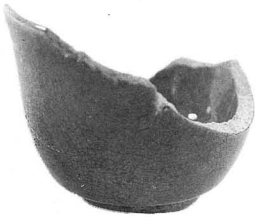
8．G－32（第22図62）

写真20　文　字　瓦



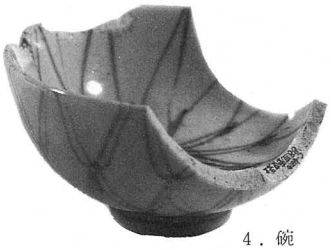
1．碗
（第23図65）

2．碗
（第23図66）



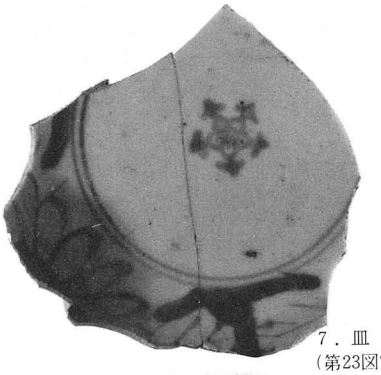
5．碗
（第23図70）

3．碗
（第23図67）

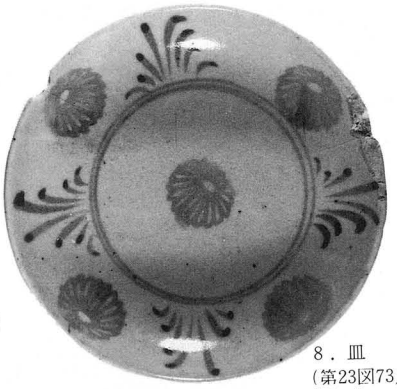


4．碗
（第23図68）

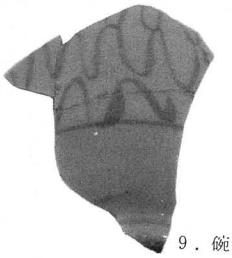
6．皿
（第23図71）



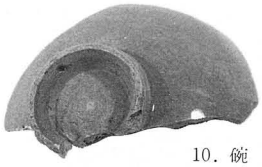
7．皿
（第23図72）



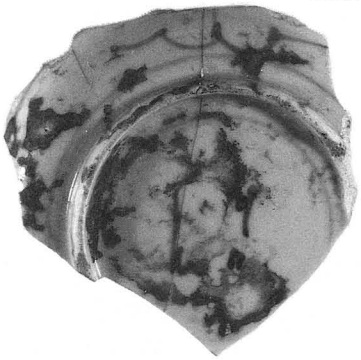
8．皿
（第23図73）



9．碗



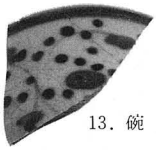
10．碗



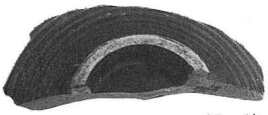
11．碗

12．蓋

14．碗

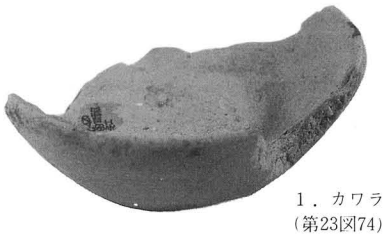


13．碗



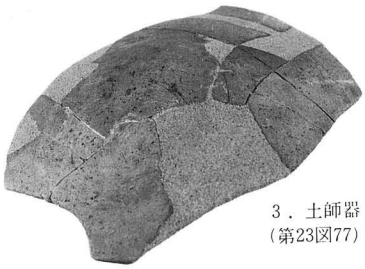
15．碗

写真21　近世陶磁器

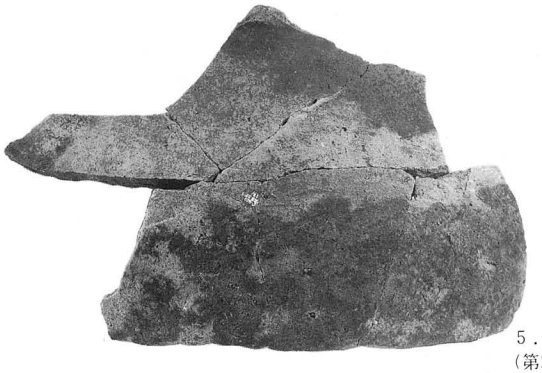


1．カワラケ
（第23図74）

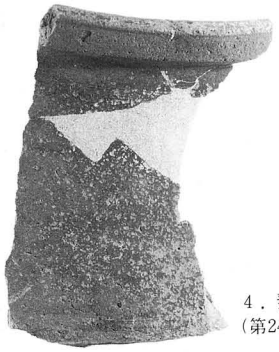
2．カワラケ
（第23図75）



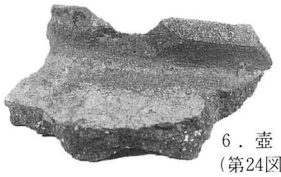
3．土師器
（第23図77）



5．甕
（第24図79）



4．甕
（第24図78）

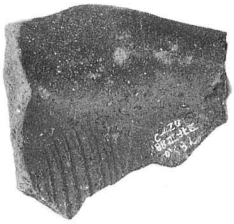


6．壺
（第24図80）

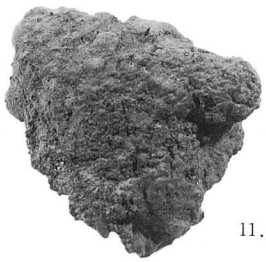
7．甕
（第24図81）

8．ねり鉢
（第24図82）

9．瓦質の擂鉢
（第24図83）



10．瓦質の擂鉢（片口・第24図84）



11．鉄滓

写真22　その他の遺物

〔2〕郡山遺跡

郡山遺跡はJR長町駅東側の広瀬川と名取川に囲まれた位置にある。陸奥国府多賀城が造営される前の官衙及び寺院跡等が発見されており、官衙・寺院跡は7世紀後半～8世紀初頭の年代と考えられる。今年度は個人住宅等にかかわる事前調査を7件実施した。以下にその概略について報告を行い、詳細は「郡山遺跡IX」で報告する。

第75次調査　II期官衙南東部の南外側地区にあたる。発掘された遺構は溝跡2条、溝状遺構1条、土坑1基、ピット2などである。溝状遺構からは栗囲式土師器の範ちゅうに入ると思われる破片が多数出土した。

第76次調査　推定寺域中央西側に位置するところで70次調査E区の北側である。その結果、ほぼ東西方向の溝跡が発見された。遺物は布目瓦片2点だけであった。

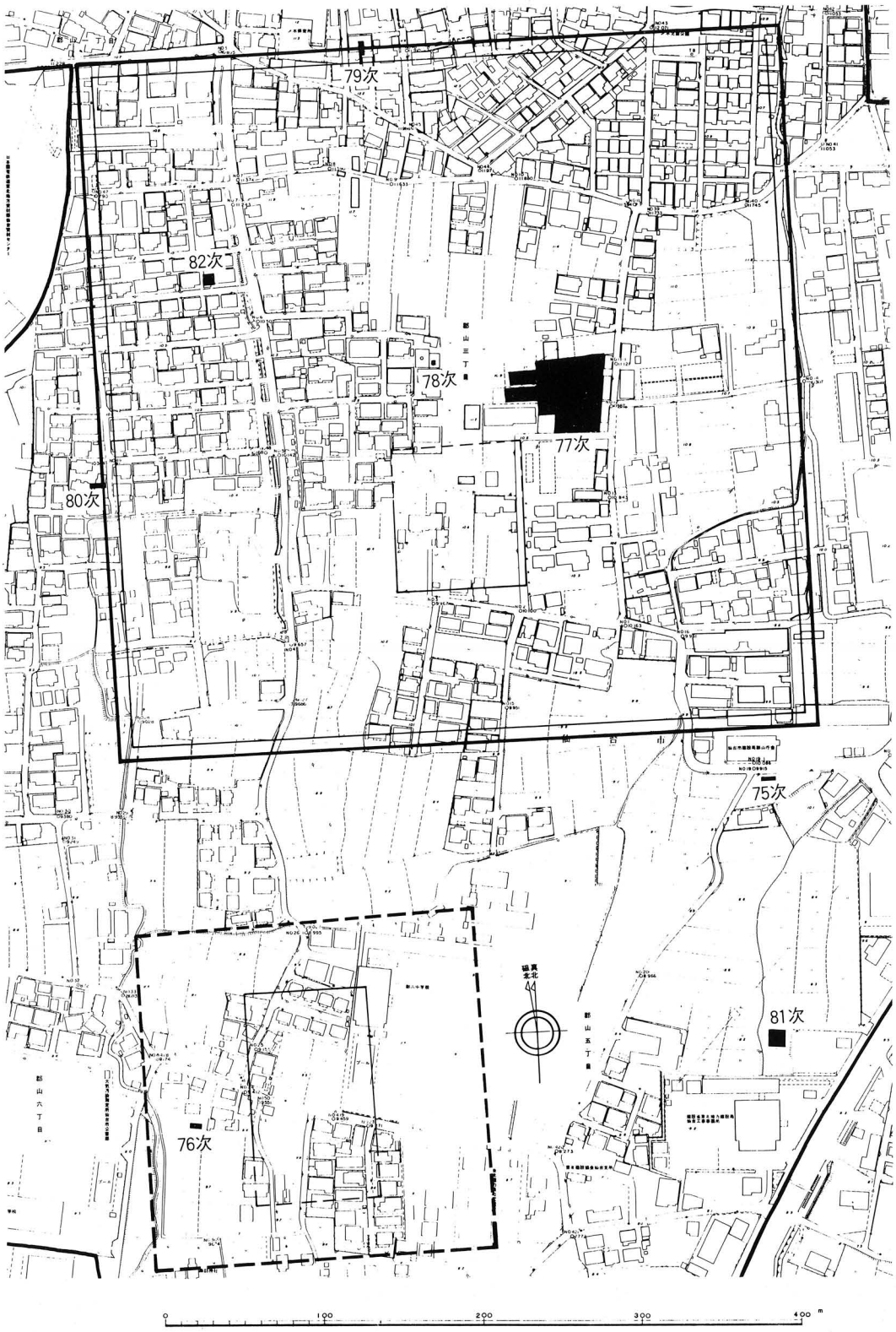
第78次調査　II期官衙跡のほぼ中央部にあたる。レンガ用粘土を採取するため削平を受けた地域であったため、削平の深さを確認することで調査を打切った。

第79次調査　II期官衙北辺のほぼ中央部にあたる。栗囲式期と考えられる竪穴住居跡1軒とそれを切っている溝跡1条が発見された。溝跡はII期官衙北辺を区画する大溝と考えられる。

第80次調査　II期官衙西辺中央より若干南に下ったところである。発見遺構はII期官衙西辺を区画すると考えられる溝跡1条である。

第81次調査　推定寺域の東方約200m、仙台バイパス西側に隣接した位置であり、遺構及び遺物の発見はなかった。

第82次調査　II期官衙中央部の西側である。78次調査区同様、レンガ用粘土採取のため削平を受けたところで、遺構の確認はできなかった。しかしながら削平下面において須恵器片、土師器片が採集できたことで、付近に遺構が存在していたことが推察できる。



第26図　郡山遺跡と調査位置

文 化 財 課 職 員 録

課　長　　早坂春一

管理係

係　長　　成田時雄
主　任　　岩澤克輔
主　事　　白幡靖子
〃　　山口　宏

調査係

係　長　　佐藤　隆
主　任　　結城慎一
教　諭　　佐藤好一
〃　　太田昭夫
主　事　　篠原信彦
〃　　木村浩二
〃　　佐藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
教　諭　　小川淳一
主　事　　吉岡恭平
〃　　渡部弘美
〃　　工藤哲司
教　諭　　橋本光一
主　事　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　佐藤良文
〃　　長島栄一
〃　　工藤信一郎
〃　　荒井　格
〃　　中富　洋
〃　　平間亮輔
教　諭　　渡辺雄二
〃　　高倉祐一
主　事　　宮崎　明
〃　　佐藤　淳
〃　　渡部　紀
〃　　大江美智代

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—（昭和57年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書—（昭和58年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書—（昭和59年３月）
第75集　仙台平野の遺跡群Ⅳ—昭和59年度発掘調査報告書—（昭和60年３月）
第87集　仙台平野の遺跡群Ⅴ—昭和60年度発掘調査報告書—（昭和61年３月）
第97集　仙台平野の遺跡群Ⅵ—昭和61年度発掘調査報告書—（昭和62年３月）
第111集　仙台平野の遺跡群Ⅶ—昭和62年度発掘調査報告書—（昭和63年３月）
第125集　仙台平野の遺跡群Ⅷ—昭和63年度発掘調査報告書—（平成元年３月）

仙台市文化財調査報告書第125集

仙台平野の遺跡群Ⅷ

—昭和63年度発掘調査報告書—

1989年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市国分町3—7—1

仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント

仙台市立町24—24　TEL263—1166